

地の果
アングレン捕虜収容所

木村孝良

一九九五年八月一日

記述

大東亜戦争終結五〇年を記念して

目次

一九四五年一月一〇日	捕虜	七
シベリア鉄道を北西に		一〇
列車強盗 未遂		一五
あわや 惨殺		一八
列車は西から南へ		二二
正露丸の効きめ物々交換		二四
諦めよ		二七
目的地 アングレン着		三〇
収容所入所 作業所へ		三二
「金」との出会い		三七
妃殿下煙草の火		四〇
穴掘りのノルマ		四三

石の土台造り

四五

煉瓦つくり

四八

サビツツキー中佐

五二

新便所 女囚への煙草

五五

日本には太陽が二つある

六〇

憲兵

六一

すり

六六

シユターブ勤務

六七

ユダヤ人との交際

七一

「私は捕虜ではない」

七五

日本新聞

七八

輪読会

八一

セスタコフ上級中尉 ダモイ

八七

虱 蚤 南京虫

九五

ドイツ人の反ソ思想

九八

レバー キニーネ

九九

鉛筆 インク ペン先

一〇二

センナリ センナリ

一〇四

「ヒツチハイク」歓迎

一〇五

おわりに

一〇九



一九四五年十一月一日 捕虜

「ダワイ ダワイ ヴィストラー」

《さあ さあ 早く 早く》

自動小銃を肩に、若いソ連兵は我々を貨車に乗り込ませようと、列車の周りを走りながら早く早くと追い立てる。私は昨夜のお別れ会のチャンチュウの飲み過ぎと、防寒襦袢、防寒袴下、軍足二枚の重ね着のいでたちでは、胸まである貨車の床はあまりにも高く、到底動きは取れない。誰かが尻を押して呉れる。正味五〇キロ弱、風袋一〇キロ（？）の私は戦友の協力で漸く貨車ににじり込む。湯岡子〔注〕の兵舎で作ったリュックサックも軍足三足の白米と乾麺麴三袋、石鹼の匂いの無い新品の下着類等、捕虜の旅行としては贅沢な荷物でかなり重い。煙草（緑）の包みは、先刻我々捕虜の行列に泣きながらついてきた鞍山の居留民の女の人達にやってしまったので、荷物が減って良かったと思いつつも、ちよつと惜しい気がした。満鉄の貨車は流石にかなり大きい。造作は新しく捕虜輸送用に二階建に改造したものであろう。中央にダルマ・ストープがある。周りを見ると粕谷、清

水、臼射、程原、古宮たち同年兵、三輪軍曹、仲本伍長も一緒だ。貨車に乗らない見送りの中に、複雑な顔の菅谷准尉が見える。傍に海保曹長もいる。あれ、一緒に行かないのかなあ？

昨日、日夕点呼の時に居て、その後行方不明だった週番の小倉上等兵の姿は勿論無い。何処へ隠れてしまったのか。

もう乗り込む者はいないようだ。空いている扉から、列車の脇を行ったり来たりしているソ連兵を見下ろしていると、

「ザックルワイ」

《閉めろ》

貨車の扉が閉まる。そして錠が掛けられ、その上針金でぐるぐる巻に補強しているらしい。やれやれ、とうとう捕虜か。でも不思議に悲愴感は全く無い。八月十五日の昼に鞍山の戦隊で敗戦を知り、もう三か月になっているので敗戦ボケも治癒？したのかも知れない。背囊とリュックサックを床に並べ、背囊に括り付けてあった毛布三枚（三人分）を重ね、広げ、その上に敷布を敷くと五人分の結構立派なベッドになる。敷布は貨車の壁にも張り、これならなんとか外気を防ぐ手立てにはなるだろう。ややあって貨車の連結器がガチャン

と大きな音を立てて貨車は動き出した。さて、何処へ連れて行くのだろうか。

南に行けば大連かもしれない。然し錠まで掛けた貨車だ。色々噂話はあるが、私はきつとソ連に連れて行かれると確信していた。

八月十五日、終戦の僅か一週間前の八月九日に、日ソ不可侵条約があるのを踏みにじり満洲に侵攻してきたソ連軍、軍靴は破れ、みすぼらしい服装でありながら、兵器は兵一人ひとりが、自動小銃を携帯している。さながら強力な武器を持った乞食集団といっても決して言い過ぎでは無いと思う。

六年前のノモンハン事件で、在満の日本軍（関東軍）が壊滅したソ連軍の機械化軍団の脅威、独ソ戦でスターリン・グラード攻防戦の勝利、随所に見られたソ連軍軍人の愛国心女優岡田嘉子が樺太の国境を破って入ソした事件、子供の頃見た、羅紗の行商をしていた上品な白系ロシア人等々、ソ連に対する考え方は、そのアンバランスを解き放すべき良い機会だと思い、よし、見てやろう聞いてやろうと、決心したのであった。

列車は鈍行で勿論窓は無いが、天窓があり背伸びすれば外は見える。然し車外は寒い。私達は体を寄せあつて寝てるしか無い。防寒服を着て丸くなっている。

この貨車の内装は新しく作った物であろうが、人間輸送の客車（貨車）で便所を造るの

を忘れては困る。

便所の無い住居（貨車）で、小の方は扉の透き間で用が足せるが、なにせ大の方は困る。誰かがアルミの洗面器を取り出し、新聞紙を敷いて、残骸は天井に近い窓から（明かり取り）外に捨てた。

〔注〕湯崗子温泉（とうこうしおんせん）は、鞍山市千山区湯崗子鎮にある温泉。熊岳城温泉、五龍背温泉とともに満州三温泉地の1つに数えられた。現在は中国四大温泉治療保養地の1つである。

シベリア鉄道を北西に

鈍行の列車は何処を走っているのか、窓の外が見えないので分らない。北に向かっているのは間違いない。段々寒さが酷くなる。貨車の屋根の上にはソ連兵が何人かがいる。この寒さの中、走っている列車の屋根の上に立っている。我々関東地方出身の兵では、とても考えられない。たとえ十二月の半ばで、新京南嶺の兵舎の経験はあっても、この寒さの

中で貨車の屋根の上で過ごすソ連兵の強さには驚く外は無い。

何十時間後大きな駅に着く。奉天だ。居留民と思われる人達がたむろしている。こちらには貨車の中で話を交わす事もできない。私達がいた鞍山では、進駐したソ連軍司令官が良かった為か治安はよく、婦女子が平服で生活し、忌まわしい事件は聞いた事はなかった。でも我々軍隊が居なくなった後は、一体居留民の人達はどうなるだろう。もともと鞍山は昭和製鋼所の社員等人口八万の日本人が居て、北満と違いソ連軍と戦った部隊も無かったので、ソ連軍の進駐は平和裡に行われ、私達も十一月一〇日まで昭和製鋼所の機械類の梱包（ソ連に送り、のち中国に返された由）に使われ、捕虜輸送列車に押し込まれる迄は、製鋼所の社宅等に居住し、日本に帰るつもりで、その日を待つて居た訳である。

鞍山ではソ連軍は駐留していた日本軍の兵力を調査し、ソ連に連れて行く員数を確保しようとした由で、民家に隠れている兵隊を捕まえたそうであるが、奉天ではどうなっているのか。八月九日以後、奉天には日本人が大勢いたのに治安が極端に悪く、現在、所謂日本人孤児の肉親捜しも、鞍山は全くいないのに、奉天は、かなりの邦人が可哀想な戦後の生活を強いられた模様である。

何時間かの停車後、列車はのろのろと北上を開始した。大便は相変わらず洗面器、兵

隊達は段々捕虜の身を考え、どうなるのか？と心配しだした様子である。

寝ながら清水君らと東京の話をしていると、何だ？雨が降って来た。アレ？窓からソ連兵の小便が。走っている貨車の上で小便をひっっているらしい。この野郎！でもこちらは貨車の中、切歯扼腕、仕方ない諦めるしかない。それにしてもソ連兵の寒さに強いのは、舌を巻くしかない。

列車は相変わらず時々止まる。天窓から大きな物が投げ込まれた。開けると沢山の札束だ。何万か何十万か？正しく新品の札束だ。蒙疆銀行の札である。偽札ではなさそう
だ。

剽軽者の粕谷君の提唱で、この札で博突が開帳された。（軍隊では考えられないことだ）どうせ使えない札（敗戦前なら大金持ちだが）、暇な兵隊達に取って一服の清涼剤だった。それにしても、どうしてこんな札が飛び込んで来たのだろう。

三日目の朝になって漸く扉が開いた。皆歓声を揚げ、指示により車外に飛び降りた。確か白城子の駅の近くであろう。一面の広野であり空は全くの日本晴れ、風はそよ風で気持ち良い。今降りた列車は、何十車両か一本の線のようにである。待ち兼ねた捕虜は、列車から

離れ一列に並び、寒空に尻を出し乗車○千人が一斉に野糞をたれた。

腰を叩き、背伸びして疲れを取っていると、暗号教育で一緒だった一中隊の三沢一等兵の姿があつた。側に行き

「古兵殿、便所は、どうしていましたか。」

「便所？ 鉋で床を切ったよ」

「鉋が有るんですか？ うちの車両は切る物がなくて困っています。鉋を貸して下さい。」

「いいよ」

元教員だった三沢一等兵は、やる気のない万年一等兵らしいが親切だった。

借りた鉋のお陰で、古年次兵の一人が、俺がやろうとかって出てくれ、器用に床を切り、毛布で囲い立派な便所が出来、やっと愁眉を開く事が出来た。

便所が出来て我々車両のグループの者は元氣を取り戻す事は出来たが、行き先は五里霧中、列車はまたまた北上する。さて何処へ行くのか。

満鉄のレールは日本の国鉄のレールより幅がかなり広いが、シベリア鉄道のレールの幅はさらに広い。その為に乗り換えの必要から榆樹屯という駅で降り、少し積もった後の雪道を歩き、仮の宿舎で寒い一泊の後、いよいよシベリア鉄道だ。おそらくチタを經由して

本線に入るのだと考えた。私は地図を見るのが好きで、チタという町の名前は知っていた。かつて朝日新聞社の神風号で、飯沼飛行士、塚越機関士が東京・ロンドン間の大陸横断飛行の時、給油の為、一時着陸した町の名前がチタというのを覚えていた。満洲里を通れば、次の大きな駅はソ連領でチタであるが、ソ満国境まで、まだまだ遠い。

この辺は、興安省（南・北）の筈だが、恐らく此の度の戦争で日ソ戦の戦場となったと思われる。列車はスピードを落とし無人の駅に着いた。博克図だ。流石に日ソ戦の戦場という感がある。線路から数百メートル先に、破壊された無残な建物が見える。沢山の日本軍の兵士が、勝利の無い戦いを強いられ、多くの犠牲者を出した様子がありありと見られた。

列車はその後、札蘭屯を經由、いよいよ満洲里だったが、ついに満洲里を通過したのは分からなかった。

我々の列車は何両編成かは分からないが、恐らく三十両位かも知れない。そして気が着いたことは、大きな駅と思われる所では、必ずといっていいほど、車輪をテスト・ハンマーで叩いている。安全の為なのか、車輪が老化しているのか分からないが、兎に角安全を考えていることは良いことだ。

〔注〕チタールロシア連邦、東シベリア南部の都市である。シベリア連邦管区チタ州の州都

列車強盗 未遂

列車は鉄橋にかかる。何という河だろう。エニセイ河かしら、或いはオビ河かしら？
私は残念ながらソ連の河はあまり詳しくは知らない。

列車はゆっくり河を渡るようだ。鍵が掛かった扉の外で、ガチャガチャ音がする。何だろう。今日も天気は寒空だ。間もなく鍵が開いて、防寒外套とフェルト防寒靴を履いた若いソ連兵が二人、真つ赤な顔の童顔の兵士だ。未だ二十そこそこだろう。体格は中肉中背。

「ダワイ　ダワイ　チャースイ・イエス　ルーシカ・イエス」

薄暗い裸電球の下で、寒さで動物園の猿のように抱き合って寝ている我々には、何を、いつているのか分からない。奥の方に寝ていたと思った増成少尉が、寝ている者を踏まぬように皆の前に出て来た。流石にリーダーの増成少尉は、鞍山製鋼所作業以来のソ連人との交渉の経験か、侵入の兵隊が何を言っているのか分かったらしい。

「時計や万年筆を出せ、早く、早くと言っている。今、丁度河の上だ。奴を河へ突き落とそう。鉄橋は長い。解りやしないよ。やっちゃおう。」

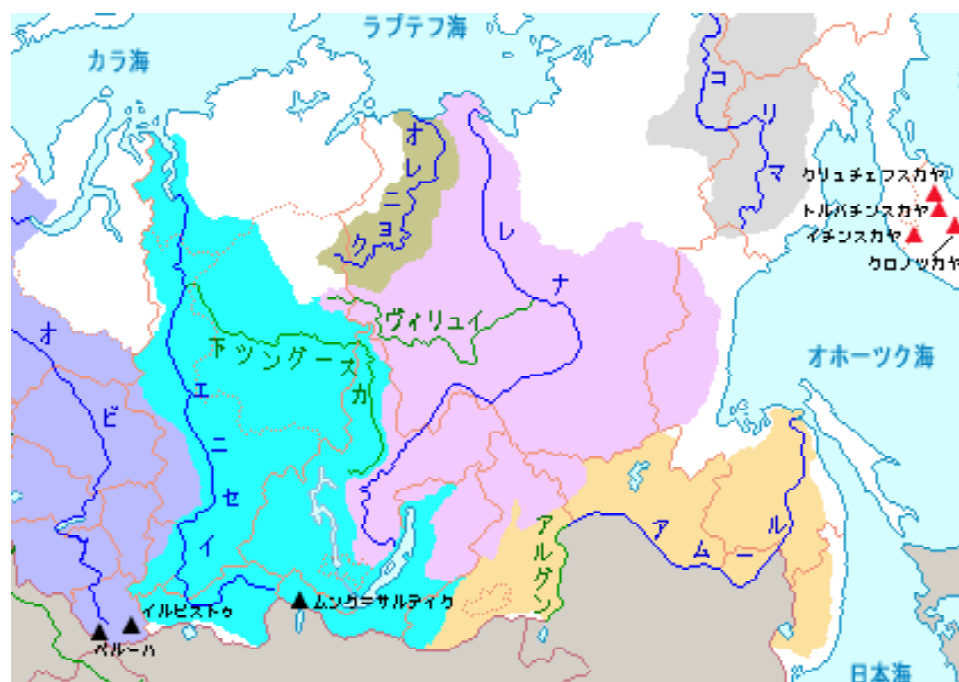
気の強い新品少尉の増成さんは、本当にやりそうだ。正に怒髪天を衝く形相だ。気の弱い私は、ただ呆気にとられているほかない。でも、そんなことをしたら大変だ。何とかしなければ！

明るく敏捷で、下士候の粕谷一等兵（通称己代造親分）が、忠臣蔵の松の廊下も斯くあったろう、梶川与惣兵衛さんながら、増成少尉を後ろから羽交い締め、「増成少尉殿お待ちください。後でとんだ事になります。我慢して下さい。増成少尉殿」

二人のソ連兵はこの様子を見て、増成さんの気迫に、圧倒されたのか、二人顔を見合わせ早速車外に退散してしまった。私を含め、増成少尉を囲んで、よかった、よかったと大喜び。でも、もしあの時、勢いに任せて、あのソ連兵を突き落としていれば？

桑原 桑原

〔注〕エニセイ河＝ロシアを流れる河川である。北極海に流れ込む最大の水系で、世界でも第5位の長さである。オビ河はロシア連邦西シベリア低地を流れる川である。カザフスタン共和国の領内を通る。南北に800 kmほどあるオビ湾を通じてカラ海に注ぎ込む。



あわや 惨殺

私は、去る八月十五日の朝、湯崗子の第三航空情報連隊本部で、電報班長の曾我少尉からの命令で第四中隊の小林伍長と二人別室に呼ばれ

「お前達も知つての通り、八月九日ソ満国境から侵攻してきたソ連軍は怒濤の進撃で、我が軍は後退を余儀なくされている。従つて連隊の通信も混乱し暗号の解読が困難になっている。よつて優秀な暗号手を戦隊（飛行場の通信所）に派遣し、戦力の増強を図らなければならぬ。小林伍長と木村一等兵は、直ちに戦隊に行け。但し二人とも絶対に死んではならない。生きて暗号手の本分を尽くしてくれ。お前達一人の戦力は四個師団に匹敵する。（眉 唾）」

なんて煽てられ、直ちに玉蜀黍畑の中の連隊から満人部落のトンロップ部落経由戦隊にむかった。

八月の南満は今日も抜けるような空で正に日本晴、風もなく心地よい。これでは電波もスムーズに届くだろう。

初めて見る戦隊の通信所は、円いペトンの半地下で、同年兵の谷田もこの中でトントーをやっているのだろう。遊びに来た訳ではない。申告しなきゃ。

戦隊の本部に行き直属上官の石田中隊長に申告。

ご苦労、実はこれから東京からの放送がある。重大放送であるから、よく聞いてくれ。お前進は暗号手だから電波が少々悪くても、意味が分かるだろう。放送は正午だそうだが、着剣して準備しておれ。」

着剣？何で着剣するのだろうか？最後の抵抗で、頑張れと言われるのかも？天皇陛下の放送とは露知らぬ私だった。

ラジオの放送は内容が全く分からなかった。石田中隊長から

「放送の内容が分かったか？」

と聞かれたが

「全く分かりません。空中状態がかなり悪いです。困りました。」

間もなく総理大臣鈴木貫太郎の放送が始まった。これは天皇の時と違い、はっきり戦争が終わった事が分かった。将校達は、また私の机の周りに集まった。

石田中隊長 「わかったか？」

木村一等兵 「分かりました。戦争は終わりました。負けました。」

それを聞いて前列中央に立っていた少尉（他の中隊で顔を知らぬ将校）が、なに！敗戦だ！貴様は何を考えているんか。我が軍には敗戦はありえない。そんな事を考えている奴は、生かして置けない。斬る！

無表情で、その将校の隣に立っていた我が中隊長の石田中尉は

「木村逃げろ、早く行け！」

私は脱兎のごとく通信所を逃げ出した。少尉は流石に私を追うような事は無かった。戦争が終わったなら、私達に用はない。小林伍長と相談して取り敢えず湯岡子の部隊に帰ることとした。

我々二人は、玉蜀黍畑の中の道を急ぐ。人通りは全くない。八月半ばの昼過ぎで汗がしたたる。やがてトンロップの部落である。

あれ、驚く勿れ、泥の家の満人の家の前に大きな蒋介石の肖像画だ。昨日までは考えられない事だ。こんなものを、何処に隠していたのか？塹の中には人影はない。恐らく積年の恨みを果たした宴を開いているのだろう。門から二、三人が出て来た。胡散くさそうな

顔をした中年の男達だ。私達は腰に牛蒡剣だけだ。とても彼達と渡り合うつもりはない。もう戦いは終わったのだし戦える武器も無い。黙って通るしかない。私は、勿来の関の弁慶や、九郎判官義経の心境を思い、小林伍長と早く逃げる相談をしている時、戦隊の方から馬車が来た。四中隊の陣営具係の加地軍曹だ。馬車の上には毛布が積んである。地獄に仏。小林伍長が戦隊からの帰りと話したところ、この際一人でも多い方が心強いと馬車に便乗を快諾してくれた。毛布の上でラクチンこの上ない。お陰で思ったより早く部隊の門をくぐる事ができた。

加地軍曹は神宮皇学館出の神主の卵だった。

なお、私を斬ろうとした少尉は、その後、湯崗子の近くの千山で、道に迷ったソ連軍の将校に道を聞かれ、教える代わりに軍刀で斬ってしまい、ソ連軍に逮捕され何処かに連れ去られたそうである。

列車は西から南へ

列車は厳寒のシベリアを西に向かって走る。兎に角寒い。貨車の天井近くに吊り下げてあった水筒が、蓋を閉めてあった為、中の水が氷結して割れてしまった人がある。私達は水筒に水を入れ、ストーブに掛け、湯タンポ代わりにした。その湯タンポが天井に吊るした為、蓋をすると爆発するのが分かった。寒暖計が無いので外気が何度か想像もつかない。

初年兵の私は、列車が水道のある駅に停車すると、飯盒を両手に三個ずつ持って井戸で給水した。貨車の壁（外板）は、注意しないと、手袋が吸い付く、聞いた話だが、うっかり転んで口が貨車の鉄板にくっつき、取れなくなつて、周りの兵隊が皆でツバを掛け合い、やっと鉄板から離れたことが、あったそうである。

初年兵の私は、常に水汲みをかけて出た。他の初年兵の人は、別にそれを私に押し付けたのでは無く、私自身が自分の運動の為にやっているのです、他意はない。でも、ちよつと寒い。

新京の教育隊で私の手のアカギレがひどいので、班付の橋本上等兵が

「お前達、木村にばかり水仕事をやらせているんじゃないか」

と叱った事があつた。私は、母親ゆずりのアカギレ症で、殊更私ばかりが、水仕事をさせられたのではない。然し、軍隊のこと、言い訳は、ご法度。同年兵諸君、ごめんなさい。

列車が止まると、隣に砂糖大根や坑木、石炭を積んだ無蓋車が止まっている事がある。

特に二抱えもある巨大な木材を積載している百トンもあるかと思われる、材木専用車が停まっていることがある。これは恐らくシベリアの奥地からの荷物であろう。引込線の奥に長いワム（貨物列車）がいることがある。我々の乗っている貨車と同じ人間輸送用の貨車である。というのは、我々が過日糞をポイした窓に有刺鉄線で雁字搦め蓋をしている。良く見ると若い女が見え隠れに何人もいる。器量のよい上品な顔をした白人達だ。恐らく囚人だろう。皆普段着で、制服らしきものは着ていない。何処から何処へ連れて行くのだろう。でも表情は明るいのが救いだ。囚人列車に比べ、私の方は、先に錠が掛かった扉も、風が入らぬように閉めきつてはあるが、もう何時でも開けることが出来る状態である。逃亡の恐れも無いと思ったからだろうが、もっとも、此処から逃げても、どう仕様も無い。

どうも、南に向かっているようだ。貨車の中は、かなり暖かくなっている。もう水筒の湯タンポは、不要だ。外は相変わらず風はない。もう、半月は、経っただろうか。鈍行の旅行も、また楽しいものだ。私はもう環境に慣れたのか元氣だ。でも仲間の内に便秘の者が、かなり出て来た。水分の不足だろう。井戸のあると思われる大きな停車駅で、飯盒で給水しているのだが、野菜不足の為？便秘の患者は増えるだろう。誰かが

「そうだ、灰を飲もう。灰を飲めば便秘はなおる。」

我々都会に育った者は知らぬ事だが、農家出身者の知恵か、早速ストーブの灰を取り出し、灰に水を入れアクを作った。何人かが早速飲んだ。

征露丸の効き目 物々交換

効果観面、大きなのがでたようだ。でも、糞は貨車の床を通過し線路に落ちた。

ところが、アクが効き過ぎて、山本リンダじゃないが、どうにも止らない。特に純真な程原君とリーダー増成さんが効き過ぎた模様だ。誰かが征露丸を取り出して二人に勧めたが、

なかなか治りそうもない。ソ連（露西亜）の捕虜になり、腹を壊して征露丸のお世話になるなんて、新作落語の種になりそうだ。今は（敗戦直後）連合軍に遠慮して、名前も正露丸となっているが、当時名前が正露丸だったら、すぐ腹も正常になったかも知れない。増成、程原両氏とも間もなく治ったようである。

南に向かっているのは、駅の名前で分かった。バラナウル駅に着いた時、やっと南に向かっている事が確認できた。正にカザフだ。年の暮れというのに、流石に温暖で捕虜達も大分元気になって、故郷の話、食べ物の話で退屈も少しは緩和された。沿線も人家がある。スカーフを被った婦人の姿があっち、こっちに見える。たまには、大きな草を引き顎を出し、上の空の顔で、ペタンコ、ペタンコと歩くラクダの姿も見える。

もう、何日来ただろう。兎に角ソ連は広い。日本で言えば幹線で、特急が止まる位の駅に小さな無人駅、という間隔で駅がある。草原や砂漠になると、何時間も同じ景色だ。

全く広い。ちよつと大きな駅には、ホームから見えるレストランがある。積み木のようなカラフルな駅舎で綺麗だ。色彩豊富。

始めて見る駅のロシア語の文字は、大体ローマ字のようであるが、団子串助を連想させるのや、ローマ字の足が左右反対の物、弘法大師がイチャモンを付けたくなると思われる

字、等々、でも何とか分かるような気がする。

給水、給炭の為駅に止まると、東京の某高校の校章（剣とペン）に良く似た徽章の帽子を被った駅員が、相変わらず車輪を叩いて行く。女の住民達が貨車の周りに集まる。我々関東軍の兵隊はリッチで、靴下とか手袋、中には豪華な防寒外套の員数外を持っている下士官もいる。ソ連人は、国を挙げての総力戦を戦った為、被服が極端に欠乏しているので、捕虜の装備（被服）は、よだれが出る程、羨ましいのだ。誰かが輸送中で食料の之しい捕虜と物々交換をして味をしめ、通る捕虜列車を待ち受けて、貨車の周りに集まったのだらう。

我々も負けずに貨車の壊れた外板の透き間から、軍足の片一方を出して見た。すると一センチ厚の丸いパンが押し込まれて来た。早速そのパン（後で分かったが、ルピョウシカという）を掴み、もう片方の軍足を差し込むと、スルーと持って行かれた。このようにして見事物々交換が成立、こんなことが、何回か、あったが、その後添乗の兵隊が住民を脅かす為、マンドリン（自動小銃）を空に向けて一発。

以後透き間を利用した物々交換は中止の止む無きに至った。

諦めよ

パラナウルの次に通る大きな都会はアルマ・アタと思う。然し捕虜列車はアルマ・アタを出発、次の大都会はタシケントである。私の頭の中の地図ではタシケントでなければ、サマルカンドかも知れない。然し私達捕虜は、物見遊山の旅行ではない。恐らく辺鄙な町、或いは未開の荒れ地に連れて行かれるかも知れない。でも、どうやら寒い所では無さそうだ。どうせ、連れて来た捕虜である。なるようになるだろう。同年兵も大勢いる。我々は、航空部隊とはいえ、守備範囲が南満で、ソ連軍とは矛を交えていない。日本に帰るのは何時になるかは知らないが？

私が小学校四年だった？担任の斎藤義明先生が猩紅熱で入院されたとき、代わりに天然パーマの佐藤先生が一度教壇に立たれたことがある。

その先生は、このクラスは奈良県から転校して来た、所謂ワルガキのボスがいて、教員室

で有名だったと思うが、私達に教科を離れ、次の話をされた。

世界大戦の或るところで、フランス軍の捕虜が小さな部屋に、ごっそり詰め込まれ、身動きが出来ないどころか、口もきけない程、おしくら饅頭であった。何日かしてドイツ軍の兵士が、その部屋を開けた。群衆の真ん中に居た兵士がたった一人生きて居た。

ドイツ軍の兵士は不思議に思い、その捕虜に聞いた。

「どうして、お前だけ生きて居たのか？」

そのひ弱な兵士は、

「私は、死ぬときは死ぬ。焦っても同じこと。私は諦めることにしたのだ。」

それで、ひ弱な兵士は、頑健な仲間の死ぬ中で、たった一人生きていたのだ。

「君達は、これからの人生で、絶対に焦っては駄目だ。諦めろ！諦めろ！」

先生の話はこれまでで終わった。

今、私はそのフランスのひ弱の兵士と同じように、諦めよう。時が来れば解放されるだろう。折角来たソ連だ。諦めて卑屈にならず、留学生の気持ちで行こう。

タシケントは大きな都会だが、誰かが聞いて来て、まだ先に行くらしい。何時間かの停車で、列車は又走り、いや動き出した。頂きに雪を被っている大きな山脈がある。パミール高原？だろうか、私の頭の中では、もう、この辺は何処なんだか分かりもしない。右も左も、なだらかな丘陵で、その間は広く、川が有るらしい。兎に角行く手は、巨大な山脈の谷間というべく、かなり広い。列車は、走っている。いや、なだらかな勾配を動いている。と言った方が適切だ。この奥に我々の行く所が有るらしい。もう、人家は無い。山々は日本と違って樹木は無い。月余の旅行で腰が痛い。老人のように腰を叩く。貨車の中は案外明るい雰囲気だ。増成少尉、三輪軍曹、仲本伍長の外石田隊の面々、皆元気だ。氣候が暖かい為だろう。

何時間登っただろう。列車は止まり、やっと降りるよう命令が有り、急いで降りる支度に取り掛かった。ドッコイショとばかり、皺くちやになった敷布と毛布を畳みリュックサックを取り出した。三本有った軍靴の米も、はや、無くなっていた。乾麺麴も残りすくない。

列を作って貨車を降り、貨車の脇に並ぶと、やっぱり、捕虜の集団らしくなっている。何人いるのだろう。二千人程かしら。

目的地 アングレン着

まだ、雪が少々有る泥んこの道を、隊列を組んで緩い勾配の道を行く。よく見ると、雪の下には青い草が覗いている。こりゃあ暖かいんだな。行く手には、何か所かの小高い山がある。経験者の話では、炭鉱のボタ山だそう。石炭を掘る時に出る泥だそう。その山に、レールのような物が見える。トロツコのような物が、ウインチで上に上がっている。此処は炭坑だなあ！櫓の上の車が動いている。これはエレベーターかな？

初めて見る炭坑の情景で、泥濘みに足を取られぬように、リュックサックを背負って上がってゆくと、上からトラックが何台か降りて来る。エンジンカバーがモダンな貨物自動車で、何台も来る。自動車を避けてよく見ると車前にネームが有る。これは英文だ。スチュードベーカーだ。以前パラオにいた時、ミンダナオ島作戦の後、九州の第十二師団の兵隊が押収した戦利品の乗用車を、下士官達が乗り回していたのが、確かスチュードベーカーで、チェンジレバーがハンドルのすぐ下で、手で操作する筈で、GMC製である。こんな所にアメリカ製のトラックが来ているのか。と、米ソ協同作戦を垣間見る訳である。

あ！「鞠子上等兵だ。鞠子さん。いつ、来たんですか？」

三航情では、私達が一番早いと思われるので、不思議に思つて聞いて見た。

鞠子さんには、湯岡子で何回か会っているが、初年兵の私は、あまり面識は無いが、小柄の彼の左（右？）腕に「御意見無用の入れ墨があるのを覚えていた。にこにこ笑つていたが、御意見無用ではないが、「問答無用」と言われそうなので、「ジャー」といつて別れた。

スチュードベーカーの話が出て来たので、米国製のスマート製に比べ、日本の「スミダ」「いすず」も野暮だが、ソ連製の貨物自動車は、「ジース」というのがあるが、これは、子供のブリキ製の玩具そのもののスタイルで、マツ四角で、なんとも格好が悪い。然し、エンジンには優秀で、厳寒の走行でもエンストは殆ど無いそうである。ソ連は戦車も優秀で、ノモンハンでは、日本軍が、ハルハ河の渡河は無理と判断していた処、ソ連の戦車は、どんどん河を渡つて攻めて来た。しかも、鉄板が強く、日本の砲弾では貫通しない厚みがあったそうである。

泥濘み道を何キロかあがると、やっと収容所らしき所に到着した。勿論看板は、ロシア語で意味不明。なだらかな丘の中腹に、屋根に土を置いた半地下の兵舎様の建物が散在し

ている。周囲は、二、三メートル高さの、有刺鉄線が張られている。その有刺鉄線は二重で、その間は柔らかそうな土で、耕したようである。有刺鉄線の外側は、四隅に監視台が建っており、ワイヤーが張つてある。ワイヤーには自在鍵が付いていて、繋がれた犬が自由に走れるようになっていゐる。相変わらず逃亡防止の処置だろう。

収容所入所 作業所へ

暫くすると、門が開かれた。

「ポ・ピアチ」

「ポ・ピアチ」

並べという意味らしい。私は軍隊で縦隊の時は、大体四人ずつであるが、どうも五人らしい。その方が掛け算が楽かもしれない。

整列が終わると門から数十メートル先の半地下の収容所に入った。半地下なので、二、三段かの階段を降りて中に入る。

真ん中に鉄板を張った粗末なストーブがあり、その周りに板で造った二段ベッドが並んでいる。ベッドは群青色？で寸法は良いのだが、館こは栄養失調そのもの、藁ではなく枯草の代用で、急遽作られたと思われるのは、軍隊用語の所謂員数合わせの為だろう。板は勿論粗削りだが、毛布二枚を敷き、掛毛布二枚で足元にリュックサックを置けば上下二人分の寝台が出来た。二階の人が動くとき寝台は、がたがた揺れる。これから、いつまで、こんな寝台の生活が続くのやら。将校の部屋は、兵や下士官とは別で、兵舎の奥にしつらえている。

私は古宮君と一緒に寝台でこれから暮らす事になるが、木更津出身の彼は少々愚痴が多い。東京出身の高間上等兵は近くの二階の住人で、鳥取県西伯郡手間村出身の、石田節夫兵長（彼は時々私の寝台に来て、郷土自慢の大山や、皆生温泉の話を得々と喋った事が忘れられない）石田節夫さんは復員後早い時期に病死されたそうである。

簡易ベッドが落ち着くと、間もなく身体検査だ、宿舎の中での行列だ。女医さんが聴診器は持っていない。医者スタイルは聴診器は付き物。忘れたのかな？尻を出して、寒そうな、精鋭関東軍の兵士が行列をつくる。勿論問診などはない。女医が尻を摘まむ。一人が助手だ。

「ピエロイ」「フタロイ」「ツリーティー」

要するに一級、二級、三級等、体格の格付けだ。女医の摘まみ加減で格付けが決まる。

正に屠殺場の豚の行列だ。体格の格付けで、一級の人は炭坑の作業、二級、三級の人は所謂岡作業（建築関係）、救いが有るのは「オーカ」といい、休養棟で作業は無い。後で気が着いたが、我々は三か月に亙る鞍山製鋼所の機械の解体の使役の後、ここに來たのだが、敗戦直後に捕虜になって、ここウズベックスタン・アングレン市三七二収容所第六分所に収容されたグループは、先任の特権で、収容所の炊事、理髪、滅菌場、浴場等の所内作業員となり、既得権益のように炭坑その他の労働には従事していない。何か不公平のような気がする。

いよいよ作業場に行くことになった。昼食の黒パンを腰に、門の前に整列した。増成少尉が我々の、グループの班長である。一個分隊位かと思う。頑健の者は炭坑かな？

「ポーピアチ」

《五列に並べ》

防寒帽を被り小銃（ウイントプカ）を背中に背負った兵士が列を勘定する。

今日も、天気が良い。長い旅行の後でも、兵隊さんは勿論元氣である。お腰に付けた黒

パンは、今朝の食事の時支給された、三五〇グラムの固まりである。黒パンは搗き減り、九六%の小麦粉、でも何が混じっているかは、定かでは無い。燕麦と思われる粃のような物も入っている。酸っぱい、所謂黒パンである。

兵士の数の確認が終わり、門が開かれ、我々は増成少尉を先頭に、いよいよ作業場に向かう。他には、何組かのグループが、三三五五、中には僅か、四、五人の者もある。さつき数をしていた兵隊は後尾からついて来る。何の作業かしら？ 門を出て、なだらかな岡を下ると、一面真っ赤な花の側を通る。何の花だろう。赤が鮮やかで赤い絨毯を敷き詰めたようだ。（後で聞いた処、多分ケシノハナだろうと言われた。ケシノハナなら阿片の原料の筈だが？）

振り返ると、収容所の裏の丘の中腹に、何本かの柱が行儀よく並んで立っている。墓標のようだ。初めて作業に行く時に墓標の洗礼とは嫌だなあ。

来る時、歩いた方角は、左右の丘の間に線路があるのだろう。遠くに山の陰はなく明るく、遙かに遠くタシケントがあるのだろう。パミール高原？の頂きは、白く雪が積もっているのだろう。聞くところによると、ここアングレンは、海拔二千六百メートルの高原で、暖かく、青森の人に聞いたが青森と同じ位の気候であるとのこと。ただ極端に雨が少な

く湿度もなく過ごし易いところだそうである。

収容所の近くは矢張り炭坑で、丘の中腹には、坑木や石炭を積んだトロツコが行き来している。

草原の道を暫く行くと、行く手に、積み木のような建物がある。この建物に向かって下から道がある。その道の舗装が、今回初めての作業である。監督と思われる男が、増成さんに、

「ここまで、砂利を敷いてくれ」

と指示が有った。

増成さんは、何時の間に露西亜語を覚えたか？勿論ブローケンと手まねで、その男の指示が分かったようである。

増成さんは、所謂ポツタム少尉で、大阪帝国大学工学部出身の秀才。同僚の仲野少尉（桐生高専出身）の自殺後、湯崗子の第三航空情報連隊第五中隊の隊付将校として我々の長として、ご苦労していただく事になる。

東京京橋に東京事務所のある増成動力工業株式会社の御曹司で、後年、シベリア抑留を作曲し一世を風靡した歌「異国の丘」の作曲者の吉田正氏が、入隊前に勤務していた会社

が増成動力工業だという記事を、何かの雑誌で見た記憶が有る。例の列車強盗の後、ご本人は問わず、語らず、僕は村上水軍の末裔だと謙遜しておられたが、とても海賊の子孫とは思えない紳士である。先頃（一九九五年一月一七日）の関西地区を襲った大震災で、芦屋の本宅が全壊、奥さんが負傷、ご本人は別棟で無事、今はご夫婦ともお元気だそうでありである。

「金」との出会い

道路舗装の監督は「金」という朝鮮系の男で、顔は四角、目は細く赤ら顔で、憎たらしい風貌で、付き合いにくい感じ。でも頭は良さそうだった。

我々増成ブリガード（増成班）は血気盛。「金」が注文した道の舗装は、ただ砂利を敷くだけ、またたく間に終わってしまった。「金」は、その早さに吃驚したようである。

「じゃあ、あと、此処までやって呉れ。」

こんなに早くやってしまって、誰も疲れた顔をしていない。「金」は日本兵の力に驚くと

同時に、ノルマ（基準）を上げた訳であろう。然し、「金」の再度要求したノルマも、又も簡単に達成してしまった。

フハイカ（綿入れジャケット）のポケットに手を入れ事務所から足早に帰って来た「金」は、

「ご苦労さん。さっき、此処までやったら帰っていい。なんて言ったが、ソ連では八時間労働が基準なんで、今から帰すわけには、いけない。五時までやってくれ。」

増成さんは、怒った。然しこちらに来る貨車の中では、今にもソ連兵を河に突き落とそうとした時とは違い、青い顔を引き付け我慢しているのが、はっきり分かった。

エネルギーの塊の白石兵長も、

「しようがない、やりましょう。」

の声に、皆も渋々ラパーツカ（スコップ）を取って、砂利敷きの作業を継続した。スコップといっても、我々の概念のスコップとは違い、鉄板を切っただけで、厚さも大分厚い。スコップは元来匙のようになって、土や砂利が上手く入るようになって、なっているものだが、柄も太い丸太ん棒で、日本人に取っては太過ぎて、あまりにも、ソ連らしい製品で呆返る。

騙された我々は憤懣やかたない心境で収容所に帰った。なお、ラパーツカが折れ易い

ので、修理に時間が掛かり過ぎ、ノルマで損をするのを増成さんが気付き、その旨監督に申し入れた処、修理に要した時間は勿論ノルマに加算するのが当然との答えだったそうである。その監督は「金」ではなかったと推察するのは、聞くところによると、「金」は日本人に異常に敵愾心をもっている。と聞いている。それは、朝鮮が日本の植民地当時、日本政府の圧政に恨み骨髄に徹するそうで、今でも、親の敵、お祖父さんの敵と言っている、そうである。

砂利敷き作業は毎日続き道路は段々整備され、その道に事務所（カントーラ）に通うソ連人達を通るようになった。この建物は何の仕事をしているのか、知る由もない。我々は、この道を、増成街道と命名した。建物の前には馬を繋ぐような柵があり、繋がれた馬の牡、牝が、あられもない格好をするのを、あれよ、あれよと呆れて見物した事もある。

妃殿下 煙草の火

増成ブリガードは、「金」もその真面目さに、信用したのか煩い事は言わなくなった。通行人の中に、毎日通る、体格の良い三十位の女性がいる。胸を張り尻を振り、日本人の女性に比べ、色が白く、中々のシャンである。真つすぐ前を見て歩く姿に私は「宮様」と言うニックネームを付けた。通るのを楽しみにしている「宮様」は、その内段々と腹が大きくなって、いるようである。後でいう建築作業の頃になると、いよいよ腹が大きくなり、廳で通らなくなった。

ある雨の降った翌日、増成街道のふちに腰を掛け煙草を吸おうとした。煙草といっても収容所の給与では、所謂刻み煙草の草で、日本の「みのり」とか「白梅」より、刻み方が、粗いが味はあまり変わりはない。此処でいう煙草とは、マホルカといって青いというか、薄緑色の草で、刻んであり、新聞に巻いて吸う、ちよつと辛いようだが、結構煙草として旨い。新聞紙に巻いて、後、唾をつけて出来上がり。不思議な事に、同じ新聞紙であつてもプラウダ（共産党機関紙）が一番旨い。イズベスチャー（政府機関紙）や、その他の新

聞は、どうも紙の匂いが、煙草には向かないようだ。

さて、話は少々戻るが、雨の降った翌日で、しけたマツチは仲々つかない。仲間内で誰かがマツチをもっているが、通りかかった初老の男に、おぼつかないロシア語で、

「ダワイ ペリクリー」

《火を貸してください》

と、呼びかけると

「アハー」

と領いて、私の前にしやがみこんで、フハイカのポケットからマツチを取り出した。

私のロシア語も通じたんだ。少々嬉しかった。

然し、湿っているので点火しない。十本位やっても駄目、私は気の毒になって、もう良いです。悪いですからといっても

「パタジーチェ ニムノーシカ」

《お待ちなさい。ちよつとばかり》

と、相変わず火を点けようとする。然し、湿ったマツチ棒は空になっても駄目だった。

彼は立ち上がって、両手を広げ、ニヤツと笑って去って行った。

私は、かつて岩手県の農村で、稲刈りの手伝いをした時の、お爺さんを思いだした。ソ連人、いや、ロシア人は人が良い。素朴で親切な人が多い。日本の東北の人達のようにあ
ると思う。

煙草だが、ソ連当局は、兵に刻み煙草を支給しているが、数量は極めて少ない。

（量は失念）将校にはカズベツクという巻煙草が支給される。カズベツクは、日本専売局のチェリーやエヤーシップ、或いはゴールデンバットに比べると、太さが心持ち細く、朝日や、敷島のような口付き煙草であるが、長さが大分長い。煙草の入っている方が、二センチ位しかない。外野の話では、ソ連はケチだから、一本の煙草を回し飲みするため。口をつける方が長いのだ。いや、親ソ派の人は、ソ連当局は煙草の害を考え、あまり吸わせない親心だ。表から見たり、裏で考えたりすると、色々意見が別れるものである。

穴掘りのノルマ

増成街道舗装の次は、穴掘りに移行だ。街道に沿って建物の土台用の穴を掘るのだ。寸法は忘れたが、キルカ（鶴嘴）で掘るのだが、土が堅くて仲々掘れない。仕方がないのでパール（鉄棒）を使って土を崩すのだが、仲々思うように、いかない。

未だ、ノルマの半分も出来ない。アアと腰を叩いて、皆の働きぶりを見ると、白石兵長は、既にノルマを達成したようだ。別に疲労の顔をしていない。あの人は、何でも早い。どういう顔を、いや、どんな頭の構造をしているのか？白石兵長の穴を見に行つて、早々にノルマを達成した秘密を知ることが出来た。彼は鉄板を使った。キルカを使って土を鉄板の上に落とし、鉄板だから土がスムーズにラパツカ（軍隊用語で円匙）に乗る。それで穴から土を地上に乗せるのが多量でスピードがある。私は力が無いのでそうはいかぬ。でも、きりぎりの時間でノルマを達成するようになった。皆何処かで鉄板（トタン板）を探して来て、楽にノルマを達成することが出来るようになった。流石、白石さんは、一選抜で兵長になったのが、領かれる。

穴掘りが大方完成した頃、増成隊長が口をへの字に曲げて、何やら沈んだ表情をしているので、

「隊長、どうかしましたか？」

「困った。どうしようかな」

「どうしたんですか？」

私の疑問に増成さんは、

「実は、もう計算上は、穴掘りの作業は完成している筈なんだけど、現実はこの通り、未完成なんだ。「金」にどう説明しようかと、今、考えているんだ。」

この答えに、私は何とも言えなかった。隊長は、その実績が毎回作業成績が優秀で「金」はじめ当局にハラショー・ラポーター（作業優秀者）として、監督も信用し、ある程度まかされる事になっているのと、隊長としては、隊員を信頼している為、心ならず毎日の実績の報告が実際より上回っている事の積み重ねが、そのようになったのだ。私が何ともいえなかったのは、我が増成班中の最劣等作業員と、自他共に認めているからである。

増成さんの事だから、実情を隠さず「金」に話されたのだと思う。兎に角、全然問題にならず済んだようである。

石の土台作り

穴が終わると、今度は土台造りである。すぐ脇に、水がちよろちよろ流れる河原から、石を道の上の穴の所に運ぶことになった。手頃の石が結構ある。一人でやっと持ち上げられる重さだ。平たい丸い石をハンマーで割る。よく見ると丸い石に相がある。それを見当にハンマーを振ると面白いように二つに割れる。丁度お正月の鏡餅を二つに切った形である。割れた鏡餅をナシルカ（板もっこ）で道路に上げる。大きい物は一個、小さい石は二、三個の重さは、かなり肩に食い込む。とても手が抜けそうになるので、どうせ使わない槓脚絆をベルト代わりに使った。それで、どうやら重い荷物（石）を楽に地面に上げることが出来た。ナシルカは前が私で、後ろが仲本伍長の弱体のコンビも、何とか一人前の成績を上げたと自負している。

仲本伍長は、現役五年兵で中央電信局に奉職していた通信のベテランで、沖縄出身である。通信の腕は抜群で稀に見る人格者である。軍隊にいるより牧師の方が似合っていると思われる。湯崗子の第五中隊で、或る時、粹な病気で、病室入室していた色男の内藤上等

兵に、私達初年兵が忘れて誰一人病室に食事を運ばなかった。怒った内藤上等兵は仲本伍長の一年後輩であり常々仲本は初年兵に甘い、もっと気合をいれろと余計な事をいつていたそうである。内藤上等兵は、

「仲本、貴様の初年兵の教育はなんだ！何とかしろ」

困った仲本伍長は

「初年兵整列、眼鏡をしている者は取れ、齒を食いしばれ。電気を消せ、この野郎、お前達は、上等兵殿を、なんと思っているんだ！」

と、日本軍特有の私的制裁のビンタを初年兵に浴びせた。整列した初年兵達は、あの優しい仲本班長のビンタなら喜んで戴こう。

然し、ビンタは来なかった。仲本班長は、電気の点かないのを幸に、壁に向かって自分の手をぶつけて初年兵を殴っている格好をしていた。という話を聞いた事がある。

私は、その頃、連隊本部の電報班で暗号の翻訳をしていたので、その事件には会わなかった。

そういう仲本伍長だが、どうも運が悪いのか、進級時期に必ず部下が問題を起こし、或いは、同僚のアクシデントに引っかけ損をしているという話である。

戦後すぐ、鞍山製鋼所の大孤山鉱山の機械解体に使われた時、何かの間違えでソ連軍に逮捕され、ロシア語の堪能の石田中隊長がソ連軍に折衝、すぐ解放されたことがあったが、これも誰かの犠牲だったのかも知れない。

仲本伍長は、どうも重労働は石割は兎に角、他は大体不得手のようで、私とか京都の吉田正之祐氏と同様、ノルマ達成は至難であると思われる。石割りの作業の日は、帰りには、折角拾った石を一個収容所の裏手にあるソ連兵の宿舍用に供出され、皆ブーブー言いながら、最も小さいのを放り出して宿舍に帰った。

石割り作業の結果、私の胸囲は大大大きくなったように思われる。メジャーが無いので定かでは無いが、かつては日増しの牛蒡のニッケネームがあった位だったが、三年間の捕虜生活で体が頑丈になったのは、むしろ感謝しなければならぬのかも知れない。

割った石は、切り口（割った面）を外側に積み重ね、土台を造る。川から上げる時は小さい石が軽いので楽だったが、積む段になると大きい石が能率的でノルマが稼げるわけがある。セメントを使い、結構立派な土台も何戸かが完成し、増成街道の右側に一つの小さな集落が出来そうである。

煉瓦づくり

さて、土台が出来て、上に乗せる本体は日干し煉瓦である。この辺、中央亜細亜は、アラブ同様、降雨量は極めて少ない。従って日干し煉瓦の建物は、多いのである。日干し煉瓦は、普通の煉瓦の二倍位の大きさである。製造工程は、木の枠で、二個宛成型する。木の枠を水に漬け、おが屑をまぶして水を含んだ泥を詰め込み、枠に入れ、ならして、数メートル先に運び、成型された泥を抜き出し、平らな所で乾燥する。ノルマは一日二五〇個である。

増成隊長は、班員をキルカとラバーツカを使って土を崩す者、ちよろちよろ流れている水を引いて、崩した土を泥にする者、成型する者、成型した物を運んで空ける者等々、流れ作業で生産する方法を実行した。正に分業は能率的と思うが二五〇個×班員の人数。出来上がった製品は、とてもノルマに届きそうにない。一五〇個のノルマでもきつい。無理である。とても出来ない。たまたま作業場に見に来たイワニスト上級中尉に増成さんは抗議した。

「とても出来ない。ノルマがきつ過ぎるのではないか？ノルマを下げて貰いたい。」

と陳情した処、イワニストは

「ソ連人は出来る。二五〇個のノルマは決してきつくない。」

増成さんは、

「ソ連人の本職の仕事ぶりを見せてくれ。」

イワニストは手を回したらしく、日ならずして老人と若い女の子の二人が現れた。

老人は、ウズベック人らしく、ウスベック帽を被り、白い顎髭の七十歳位の、小柄な澁団扇のような顔色であった。女の子は未だ二十歳には届いてはいないと思われる少女で、老人と同じ帽子を被り、髪は三つ編み、長靴を履き、神武天皇のスタイルで、健康そのものに見える。私達に対しても別に挨拶する訳でもないし、我関せずという態度で早速キリビーチ（日干し煉瓦）製作に取り掛かった。

この二人は、別に参考にするような仕事ぶりでは無かったが、賢明な増成ブリカードの何人かが、流れ作業ではノルマ達成は困難。各人が崖崩しから成型まで一貫してやる方法に切り換えることにより成果は上がるのではないか。という意見が採用された。

早速明日からその方法で作業することになったが、非力の者は、私はじめ、何人かが一

抹の不安を感じたのでは無からうか。

一貫作業では何といっても、崖を崩し適当な練り具合の泥を作るのが一番大切である。もうこの辺で二五〇個の分の泥が出来ただろうと、型に入れ、さて成型した段階で何時も泥が足りない。そうすると又、土を崩し水を引いて泥を作るのは大変な努力が必要である。二五〇個分以上の泥は、非力の者にとっては、それが苦勞であり、つい足りない泥を作つてしまい、やれやれ、又、何個分かを練らなければ！アア、やんなっちゃうな。見てみると例のハラショー・ラボーターの白石さんは、もうとつくに二五〇個を作つて四中隊の板谷上等兵と座つて話している。白石さん、どうして、そんなに何でも早いのか？又板谷さんも、そう立派な体では無く、スラツとした左の糸切り齒の金環が良く似合うハンサムなのだ。

白石さんには右の耳たぶに人差し指の第一関節大の塊があり、私はそれを私なりにモーパーサンとニックネーム付けていた。モーパーサンには、確か「脂肪の塊」という本があったような気がしたのでそれを思いだした為である。白石さんのエネルギーは、その「脂肪の塊」が有るのでエネルギーシユなのかと思つていたが、ある晩、彼は安全力ミソリでその脂肪の塊の剔出手術？を行った。常に野次馬根性の私は、その手術をまのあたりで見

ていたが、彼がカミソリをあてがうと、切り口からピューと脂肪が飛び出した。丁度、手作り充填豆腐状の白い物だ。彼は指で、その袋を絞って残った脂を取り出した。

「痛いですか？」

「いや、何ともない。血も出て無いだろう。」

取った跡は、ベツチャンコになっているが、あと、オゾもメンソレータムも塗ったか、どうか記憶が無い。

ご子息が秀才で、灘高校から東大文一に入ったとか？風の便りに聞いているが、どうしているかしら？

珍しく寒さが続いたある日、煉瓦作りの作業場に馬が連れて来られた。足の太い農耕馬だろう。崖を崩し、水を引いた泥の中に馬を乗り入れた。馬は泥の中を、あっちにいったこっちに来り、太い脚で泥を練る。これは助かる。冷たい泥の中では手も足も、たまらない。この寒さで、捕虜は可哀想だとイワニストの手配かも知れない。

イワニストは背が高く、あまり笑った処は見ないが、声が大きく、

「マスナリ イジスダ」

《増成こちらに來なさい》

の聲は、藤原義江ばりのテノールで良く通る。

もう何カ月もの増成さんとの付き合いで、気心も分かったのであろう。この頃はサッカーのようなものである。

サビツツキ―中佐

我々鞍山部隊がこの収容所に入った頃（一九四五年一二月）の所長はサビツツキ―中佐であつた。

作業から帰ると入浴できるのが炭鉱作業のある第六分所の特典だが、作業の帰りに兵隊が石炭を担いで 帰つて来るので有り難いと思つていた。

風呂場に行つて、見るとシャワーでなく日本の銭湯そのものズバリ、風呂好きの私は感激。相変わらず野次馬根性で暇を見て鈴木通訳にその辺の事情を聴いて見た。

以下鈴木通訳の話

此処の収容所（ラーゲル）も当初はシャワーだった。そこで私は所長、サビッツキー中佐に進言した。

日本では入浴はシャワーではない。つまり湯を掛けるのではなく、湯舟にどっぷりつか
る方法である。その方が疲れも取れるし、寒い所では身体が暖まれば風邪もひかないし、
掛け湯を充分にやれば、湯舟も汚れない。

と説明したところ、「それじゃあ、日本式の風呂を造ってくれ。実験して見よう。」とい
うことになり、結果「オーチン・ハラショー」で、こうなった。このことであつた。

サビッツキー中佐は、体格は中肉中背だが、眼は達磨さん、顎髭は、カール・マルクス
のようで、恐ろしい顔をしているが、ラーゲルにも時々現れ、私達捕虜に何か不自由な事
は無いか？とか聞かれた。彼は、外交辞令では無く、出来ることは直ぐにやり、出来ない
事ははつきり断った。収容所の売店（私は金が無いので利用したこと皆無）では所長が来
ると値段が安くなるとの噂を聞いた事がある。

事ほどさように捕虜に優しいので（日本では明治以来、反露の風潮が強い）何故かと探
って見たところ、大きな理由が分かった。

中佐の父親は、かつて日露戦争で日本軍の捕虜になり、四国の収容所の生活から、日本人の彼らに対する親切心、人道上の取り扱いに敬服、「日本人は良い民族だ。皆優しい」と、常々父親から聞かされていたので、今この収容所の長として、父親がお世話になったことを忘れないように、心している。と。

そのサビツスキー中佐は、程なく転任して、スウェトリツチ少尉と交代した。

サビツスキー中佐は転任するとき、最後のお別れに来所？した時は、達磨さんの眼は相変わらずだったが、髭は絡麗に剃っていて、襟章の中佐だけが、はつきりしていた。

なお、中佐から少尉に変わって、新任の所長に対する所員の態度が前と変わらず、奇異に感じたが、恐らく軍隊ではなく、単なる役人と想像した。後日ソ連の捕虜の取り扱いは、内務省の仕事の範疇と聞いた。

新便所 女囚への煙草

我々の汗の結晶の一つ、芸術作品の土台ができ、日干し煉瓦もかなり出来た。煉瓦が乾くといよいよ家だろう。

我々の毎日も気候にも慣れ、勿論ブローケンながらロシア語も通用する人もいるようになった。入所当時いた病人も段々減って、環境に順応して来たのだろう。

作業は流石労働者の国だけあって、我々捕虜であつても、一日八時間の労働は守られている。と思われる。昼休みと、十時、三時は休憩する。休憩は先に造った石の土台に足場板を渡して、その上に寝そべるのが楽である。ところが、誰がするのか？きまって大便だ。どうせ、後で土を入れるだろうとは思うが、何せ少々臭い。でも、疲れている身には大便の匂いなんかは意に介さない。でも、渡した板が外れたら、直接、便の上に落下するわけであるが、寝相の悪さでは人後に落ちぬ私でも、一度も落ちた事は無い。

又々、尾籠の話で恐縮ながら、収容所の便所は板張りで、渡した板が所々丸く切つてあり、その丸い所から下に便を落とす。勿論囲いは無い。隣でしゃがんでいる人と、話なが

ら糞をひる。要するに天真爛漫、でも所謂キンカクシなるものは無いから、糞が固い人は掴まる所が無いのは、困りものである。

ある時、今まで使っていた便所の他に、新しい便所が出来た。かなり大きな物で、形は今までの物と同様である。ある兵隊が、それについて側に居た収容所のソ連人に聞いた。

「私達は、何時日本に帰れるのですか？」

そのソ連人は、

「前の便所のように、この便所が一杯になれば、あんた方は、帰れる。」

その兵隊さんは、恐らく一所懸命大便をしようと思っただろう。然し、私は、ある程度満杯になれば流れてしまう構造になって居ることを見て知っていた。

そのように、我々兵隊は、休憩時間になると、何時日本に帰れるかと、ソ連人に聞いていた。彼らは、知る由も無い。収容所の人でも、それは分からない事であろう。すると聞かれた人も返事に困るのだろう。

「ヤー・ニズナーユ」

《私は知らない》

「スラージ」

《間もなくだろう》

「ザフトラ・ブージット」

《明日だろう》

聞く方も、聞く方だ。明日だろうなんて無責任な答えが帰って来る。まさか、明日本当に帰れるなんて考えた兵隊は居ないだろうに。

私は前に書いたように、見てやろう、聞いてやろうの野次馬根性。他の人ほど望郷の思いが無かったのが、健康な毎日を送ることが出来た原因の一つであろう。

ソ連人はかなりの人が新聞紙を持っている。別に天下の情勢は如何に！なんて殊勝な心掛けではなく、煙草の巻紙にするのだ。勿論字が読めない人も煙草だけは吸うだろうから。

今度の作業は石灰作り、小川の奥は石灰岩の山である。そこで岩に穴をあけ、発破を掛け石灰岩を粉砕し、炉で石灰を作る訳である。

私達は、取り敢えず岩に穴をあける仕事をする訳である。二人で一組、爆薬を入れる穴を掘る。掘った穴から耳搔様の道具で、石の粉をかきだす。合図して物陰に隠れる。発破が

終わるまで小休止。これは楽で良い。

右岸に女の囚人達が作業している。十五人位かな、どのような犯罪を犯したのか。若い娘もいる。私達同様小休止しているようだ。

一人の女が立ち上がった。私達に向かつて、

「ヤポンスキーサルダート・ダイチ　タバコ」

《日本の兵隊さん。煙草を下さい》

我々捕虜の中には、物持ちの良い人は今だに物々交換の材料を秘蔵している者は稀にはいるが、殆どの者は在庫〇、中には、武運長久とか、盡忠報国と寄せ書きのある日章旗をソ連婦人のスカーフと交換し、非難する同僚を尻自にマホルカを買い、人を煙りに巻くつわものもいる。また、毎日支給される紅茶を分けず、何人かが集まって一袋の紅茶の頼母子講を決め込む者も多い。それで作業場に売りにくるソ連人からマホルカを買うのである。

小休止していた私達は顔を見合わせた。

カンボーイは何処へいつて、いるのか。あ！居た、居た

向こうのカンボーイ（警戒兵）は座っている。

誰かが立ち上がって、マホルカの袋を見せ、こちらのカンボーイに了解を求めた。カンボーイは立ち上がって川の真ん中の石を指して、ハラショーとOKを出した。

川の真ん中の大きな石に、マホルカの袋から小出しの分を新聞紙に包み、石の上に置き兵隊は戻ってきた。入れ替わって女が取りにきた。

「スパシーボ」

《有りがとう》

女は嬉しそうに、頭を下げた。

夕方、女囚達は、川向こうの収容所に帰って行った。阿婆擦達には見えなかった。何人かのソ連人の外野の話。

「この辺のソ連人より、日本人の捕虜の方が幸せだね！」

日本には太陽が二つある

皆、気候にも慣れロシア語も結構うまくなった。作業場に来るタタールの少年は十二歳位、何しに来るのか、さっぱり分からぬ。何時も腰にタポールを差している。タタール族で小柄、色が白く睫が長い。髪は七、三に分け敏捷だ。名前はアリョーシャと言ひ、可愛い子だ。それと何時も中くらいの道具箱を下げた小柄な老人が来る。ピラ（鋸）但し、本と反対で押して切る。昔、横山エンタツという、花菱アチャコと組んで、一世を風靡した漫才師が居たが、関東大震災で鼻が潰れていたが、彼も鼻が潰れていた。名前はワツシャーという座金みたいな名前の人だった。彼は大工らしいが彼が仕事してるのを見た事が無い。でも、増成ブリガードの面々は知っている人だと思う。

やけに寒い曇りの日だった。ウズベツクの、人懐こい子供が、手を揉みながら、

「今日は寒いね。日本もこんなに寒いのか？」

「いや、日本はこんなに寒くないよ。」

「どうして？」

此処で私は悪戯半分に、

「日本には太陽が二つあるからさ。」

しまった。日本の子供なら

「おじさん。なに馬鹿な事言ってるの、頭がおかしいんじゃないの。」

と一笑に付されると思ったが、豈図らんや、周りの大人たちも、納得しているようだ。

これは困った。後で子供に謝って置こう。

憲兵

我々の仲間に、柏庄之助という兵隊がいる。終戦直後、通遼の山村隊に転がり込んだ憲兵で、ソ連軍は憲兵を目の敵にして逮捕したので、航空情報の部隊なら安心と石田隊の一員として入ソしたそうである。彼はなかなか愛想よく、とても憲兵とは見えない。休憩時間には、良く話をしたが、何でも良く覚えていた。東京の日暮里の布団屋の息子だそうだが、国鉄の駅名を東京から神戸までを諳んじているのは、ちよつと、吃驚した。憲兵はそ

んな事まで勉強するのかしら。何時か忘れたが、休憩時間に彼とくだらない話をしていた、今日も暑いね。でも、東京の土用見たいに暑くない。でも、あの飯盒を見てご覧、さつき汲んできた飯盒の水が湯気が立って居る。

丁度その時増成さんが、事務所に用が有るから寒暖計を見て来よう。と言って何処かに行った。間もなく増成さんが帰って来て、

「驚いたよ。五十三度だよ。」

「へー。」

此処中央アジアの地、地の果てアングレンの夏で経験した摂氏五十三度の数字は終生忘れない事だろう。

いつか忘れたが、煉瓦造りで崖を崩していた時、キルカ（軍隊用語で十字鋏）の先にいた、冬眠中の太くて短い蛇のような爬虫類？を捕まえた。

どうも蜥蜴みたいだ。柏さんに相談した結果、二人で食べちゃおう。

「青臭いな。」

「ビタミンAの補給になるかな。まあ、毒じや無いだろう。」

「旨くも何とも無いな。」

少し食べて、川にほうった。

翌日、所内の掲示板に、見ず知らずの草は、根に毒が有る物が有るので注意するように、とあった。これからはよそう。

例の蜥蜴は、後日上野動物園で、何年ぶりかで、対面した。腿虫類の所のガラスの箱に入られ、名前はアシナシトカゲ。原産地は中央アジアと書いてあった。食べた物の方が太くて短いような気がした。

柏さんは、間もなく復員したので、日暮里の家を尋ねてお会いした。

「貴方は憲兵だったでしょう。よく早く帰って来られましたね。」

「僕は他人の名前で帰って来たんだ。僕は名前が呼ばれないので、じりじりして居たんだが、呼ばれた人が返事が無いので、その人の代わりで帰って来たんだ。」

その事の考えられる経緯を説明しよう。

在ソの捕虜は六十万位で昭和二十三年（一九四八年）が復員のピークと思う。ソ連各地の収容所から出港地ナホトカに集まる。ナホトカには、第一、第二、第三の収容所が有り、第一、第三収容所で持ち出し禁止の荷物（例えば日誌、書いた物は一切駄目。）の没収。それが済むと第二収容所に行ける。

第二に入ると、即、日本の復員船。

だから、憲兵その他は、此処で足止めをくう。

私の場合は、ぼんやりして居たら、復員が後になっていたかも知れない。

復員兵は係のソ連兵の前に蜷集して自分の名前の呼ばれるのを今や遅しと待って居た。

「キムラタカヨシ」と呼ばれた。と思つたら、

誰かが、「ハイ」と言つて、呼ばれた兵隊達の方に駆けて行つた。私は係のソ連兵に「私は、今呼ばれた「キムラタカヨシ」ですが、今行つた人は、違うんじゃないですか。私は一九二一年生まれなんですが。」

係のソ連兵は泡食つて、件の「キムラタカヨシ」を呼び寄せた。

私に変わつて第二収容所に入ろうとした男は、本当は「キムラタケシ」で元憲兵だった。

二年目の春の検査で、思いがけず「オーカー」の診断だった。何とか人並にノルマが出る、風邪も引かず、顔色も良いし、調子が良いのに、尻の肉が痩せているのが「オーカー」資格では仕様が無い。別に痩せる為に煙草をケツからヤニが出る程吸つた訳でも無いのに、皆に悪いなと思ひながら、休養中隊に入った。

「オーカー」になると、宿舎も一番奥の、日当たりの良い所。作業は無いし、捕虜としては、王侯貴族の待遇？ 古年次兵から、良かったね、と言われ、口の悪いのは、「旨くやりやがった」という意地悪な者もいた。

此処は大体身体の弱い者の集まりなので、毎朝、看護婦と思われる女性が、入り口を開け、大声で

「シラミ イエス？」

《虱いますか？》

「ニエツト」

《いませんよ》

看護婦は首を竦め、笑いながら出て行く。

これは毎朝の決まった行事である。ソ連軍では以前発疹チフスが猖獗を極め、大変苦労したそうである。それで虱の駆除は、至上命令だそうである。所内に滅菌所があり、一人が常時石炭を焚き、熱気消毒をしている程である。聞いた話で定かでは無いが、日本の捕虜に、虱一匹いるのを見つかり、責任者は、一晚留置場のご厄介になるといふ噂である。日本でも戦後進駐した米軍の虱退治に、DDTの洗札を受けた人が沢山いたそうである。

私は、当時アングレンにいた筈である。

すり

休養中隊つまりオーカー棟にいるとき、田中君という兵隊が、入って来た。彼は三航情、雨宮隊（第六中隊）の兵隊と思うが、小さな兵隊で幹候では無いと思う。中々弁が立つ。

和歌山高商出の初年兵で、お父さんが法曹関係の人で、昭和の初期、大阪の松島遊郭事件の時の裁判官とか、それが彼の自慢で、私にその事を知っているかと聞かれ、私が未だ小学校入学当時の話で、何かの本で読んだ事がある。若槻礼次郎内閣が危急存亡の危機の疑獄で大変だったが結局全員無罪だったそうで、有名な事件だった。無学の私が、昔の話を覚えていたので、彼の私に対する点数は相当上がったようである。

その彼がある時、町に行くことが有り、ついでにバザールで買い物をしてくると得々と喋っているのです、余計な事だが、スリに十分気を付けるよう、老婆心ながら、注意したほ

うが良いよと言ったが、彼は

「札を握って行くから大丈夫。」

と言っていたが、バザールで、いざ、金を払おうとしたら、札は新聞紙に化けていたそうである。

アングレンは、元流刑地だったと言う人も居るが、囚人下番の人も居るらしい。我々は川向こうの作業に行くとき、橋を渡るが、すれ違う時、

「気を付けるんだ！」

言い合っても、誰かが時々スリの被害に遭う。

シユターブ勤務

そのオーカーに休養中に、収容所の主計係のマルコフ上級中尉が、労務係のイワニスト上級中尉と一緒に入って来た。

「この中に、計算の出来る者は居ないか。」

とのこと、通訳無しの、ご入来で、皆ポカーンとしているだけ。私はブローケンながら、ある程度通用するロシア語を操る事が出来るので、思い切って手を上げた処、

「イジスダ」

と、マルコフが一緒に来い、とのこと、おそろおそろ、ついに行くと、収容所の裏のシユターブ（事務所）に着いた。マルコフは、ロッカーからA3位の紙を出して私に見せた。これは、何かの表だ。経理マンの私は直感で直ぐ分かった。マルコフは、「これを合計して呉れ。」

という試験問題をあてがわれた。縦の合計を出し、横の合計も出し、グラント・トータルを算出するわけである。

商工会議所の一級者なら、暗算で出来るだろうが、残念ながら、そんな腕は無い。

「計算機（ソロバン）が無いと出来ない。」

「計算機は有る。」

と、ロシア式のソロバンをあてがわれた。まるでビリヤードのソロバンと同じで、珠が丸くて、一〇ある。桁は一五位かしら。本体はA3版位かしら。

「日本のソロバンなら計算出来る。」

「それなら、それを持って来なさい。」

私は収容所の事務室に行き、張替曹長（一面識も無い）に事情を話し、日本のソロバンを貸して欲しいとお願いし、旧式（五珠）のソロバンを拝借し、マルコフのもとへ急いだ。

「オー、マレンキー」「ダワイ、スカレー」

《おー 若いの 早く！》

私は早速計算に取り掛かった。ソ連人の数字は万国共通だが、えてして、4と7が、良く似ている人が多いが、今回は珍しく数字がうまいので、楽々グランド・トータルが出来た。

「オー、ハラショー トーチノ」

《おー、いいよ、間違いない。》

私が、計算が早く、正確なものには、ビックリしたようである。実は、私は商工会議所の三級程度の腕（自称）しか無いのだが、比処のソ連の将校は、初めて見る、日本人の計算（ソロバン）が、小さな道具で早いので驚いたらしい。

マルコフは、大変喜んで、イワニストと相談したらしく

「明日から、このシユターブで働いてもらう。それでよいか？　では、服装も、もっと良いものを貰って、出勤してくれ。」

私は、自分本来の仕事の出来る幸運の喜びを隠し切れなかった。

このシユターブの仕事は色々あった。賃金計算、捕虜の糧秣の計算等。

糧秣の計算は、若い青年、セナ・エイデルマンの担当である。私は、三七二收容所第六分所の糧秣の計算を手伝わされた。收容所は病人の異動等があり、毎日計算して古沢中尉の炊事に渡す伝票の計算をした。パン（搗減九六％）三五〇G、雑穀（米）四五〇G、野菜八〇〇G、植物油一〇G、動物油一〇G、砂糖、煙草等の頭割り計算。

（五十年前の事　数字の間違えは、ご勘弁）

此処アングレンは、パミール高原に近い辺鄙な所で、野菜果物の豊富なタシケント近郊であっても、交通の便が悪く、特に野菜は少なくて、私達もビタミンCの不足を心配していたが、ソ連当局としては、捕虜にはノルマ第9号という規定があり、例えば野菜が無い場合は、砂糖とか。肉のない場合は、魚もしくは油とか、全て代替の物との比率が決まっています、此処の担当者は苦勞していた。一度何だか無くて、砂糖が余って余って困った事

があつて、担当のエイデルマンと相談、皆に分からぬように砂糖を貯め、後日汁粉をふるまい、それを知った人達から大変喜ばれた事があつた。

だが、そういう話は、うっかりすると、ソ連は、誰かが糧秣をピンハネしていると考え、右翼的な考えの人達の影響と思うのは、間違っているのかしら。

ユダヤ人との交際

ある時、ルンルン気分で、ボンヤリしている時、つい「ボルガの舟歌」を口ずさんでいるとエイデルマンが、大きな丸い目を輝かして

「キムラ、どうしてその歌を知っているの？」

「ボルガの舟歌は、日本人で知っている者は少なく無い！」

「エイコーラ エイコーラ」

と、下手な声で、歌って見せると、彼は非常に喜んで、

「この歌は、僕がルーマニアに居た時、大いに歌った懐かしい歌だ。」

と言って、自分は「ユーレイ」だ。（ユーレイとは、ユダヤ人の事である。）

「あ、そう、じゃあ四王天延孝という日本人の軍人を知っている？」

「君は、どうして四王天延孝を知っているの？」

「彼は、予備役の陸軍中将で、日本での反ユダヤ人の急先鋒ですよ。貴方の敵ですね」

「ところで、キムラ、君は日本人にユダヤ人が多いのを知っている？」

「とんでもない。日本人は大和民族で、ユダヤ人はいませんよ。ユダヤ人は鉤っ鼻で貴方のような顔をしている人はいませんよ。」

「タワリッシ（同士・敬語）キムラ。それは極めて認識不足だ。日本は紀元二千六百年と威張って居るが、ユタヤは七千年の歴史がある。大昔ユダヤ人の何人かが日本に渡って帰化し、現在の日本を牛耳って居る。日本には、三井、岩崎、三菱、安田などの財閥があるが、彼らはユダヤ人の子孫である。アメリカの首脳の中にはユタヤ人が大勢居て、現在のアメリカを経済的に支配している。「タワリッシ キムラ」君は、チャーリー・チャップリンを知っているか？」

「勿論、チャップリンは知っているし、彼が時代を風刺した「モダンタイムス」の映画は

見たし、彼はユダヤ人である事は知っている。では、ソ連の首脳では誰がユダヤ人かしら？」

「ソ連ではユダヤ人の首脳はいない。ただ、鉄道（交通）人民委員のカガノウイツチがユダヤ人で、あとはいない筈だ。」

「ソ連一の商売人と言われているミコヤンは？」

「彼はアルメニア人で、ユダヤ人ではない。」

彼、エイデルマンは、私を友人扱いにして呉れている。ユダヤ人と、日本人との関係についての話の時は、彼は少々興奮気味だった。

彼との話では参考になる事も多々有るが、「みかど」の家は何へべと聞かれた時は、返事は出来なかった。彼は日本の事は色々知っている。
ある時

「君の郷里は何処？」

と質問され、

「勿論、東京だ。」

「では、東京の何処？」

「今は疎開している筈だから、千葉だ」

「キムラ、千葉は東京の隣だが、東京では無い。」

これには、呆れるばかりであった。彼は記憶が素晴らしい。彼には、いい加減な事は言えない。

一〇月一六日の朝、本部に出勤したら、彼はパピロースイ（巻煙草）を一箱呉れた。

二〇本入りかな？

「スパシーボ。ポチム？」

《有り難う。何で？》

私は何の為に、将校の煙草を呉れるのか？。私はエイデルマンに聞いた。

「おめでとう、タワリッシ・キムラ。今日は、貴方の誕生日でしょう。これは将校用の高級煙草です。今日は貴方自身日本に居れば、家族が誕生日を祝って呉れるでしょう。しかし貴方は今捕虜で、心ならずも此処にいる。今日はこの煙草で捕虜であることを忘れて下さい。」

この言葉に、マイッタ。マイッタ。

彼は民間人で別に宣撫班ではない。

これには残念ながら涙が出て困った。今でも時々思い出すと目が潤む。

「私は捕虜ではない」

各作業所から来た、捕虜の稼働計算書の誤りを直して居ると、時々現われるアパケイ（ニックネーム・アバタの啓四郎＝語源は失念）が

「キムラ、お前は、イビトヨマーチ。（悪口の最たるもの、説明は御勘弁）何故そういう風に訂正するのか！」

私は、

「マルコフ上級中尉からの命令で、間違った計算を訂正するのは当たり前でしょう。」

「キムラ、お前は！、馬鹿じゃ無かろうか。」

「ヨープロマツチ（これまた悪口、ソ達人はよく使う。これまた説明不可）」

「そういう風に直すと、収容所が損をする。少なく間違っていれば、当然直すが、多く計

算して有れば、黙っていれば、いいんだ。これからは、そういう風にやれ。」

「貴方の考えは間違っています。気が付かねば止むを得ませんが、初めから間違っているのが分かっているのを知らん顔をしているのは経理屋ではありません。収容所の損得は問題外であるとするのが常識でしょう。少なくとも日本人はそうです。貴方はソ連軍の将校じゃあないですか。どうしてそういうヒートル（ずるい）の考えを持っているのですか。納得できません。」

「ワイナープレニア！」

《捕虜》

「言われた通りにしろ！」

「出来ません。僕は、捕虜とは、思って居ません。留学生のつもりで、居るんです。」

とうとう、収容所長スイトリツチの所に呼ばれ、チョルマ（懲罰収容所）を覚悟で実情を話した。所長は、暫時沈黙していたが、

「ジャー、君の良いようにしたまえ。」

「有り難うございました」

で、一件落着。

アパケイさんには、何だか悪いように思われた。アパケイさんには、その後チョイチョイ会うが、態度が前とちつとも変わらず、感心した。

二人の争いを部屋の隅で、終始したり顔で見えて居た将校が有ったが、後日、色々お世話になった将校だった。

労務係のイワニストに会ったが、彼は、知ってか知らずか、何も言わなかった。

間もなくマルコフ主計中尉が変わり、中年のチエルナシヨウ女史が会計係として着任した。中肉中背で所謂女史タイプ。口紅を付けているが、マニキュアは時々剥がれている。十人並の器量で顔は彫りが深い。小学生の息子一人の未亡人で、難は早口。

ある時、珍しくカバンを持って宿舎に現われた。炭坑中隊に一緒に来て欲しいとの事で、早速隣の宿舎に同道した。用事を聞くと、炭坑作業の人に賃金を払うので通訳をして貰いたいとのこと。炭鉱作業の人は、トロッコ押しなどはソ連人の女と一緒に作業でロシア語ベラペラと思うので、私が行く必要が無いと言っても、兎に角一緒に行って欲しい。女史は未だ鬼畜の関東軍のイメージが忘れ無いのかも知れない。私のような小羊も、元関東軍だ。荒くれ男の集団では、一人で行くのは二の足を踏むのも止むを得ないと思う。

炭坑作業の兵隊は作業も比較的楽だし、賃金も貰えるし、真っ暗の坑道の中のトロツコ押しで、ソ連婦人と一緒にの作業では恋も生まれるだろうし、昼の弁当も女と一緒にでは、捕虜冥利に尽きるという不心得もいる。

売店ではおつまみにパミドール（トマト）の塩つけも売っていて、非番の日には、ベッドでヴォトカを聞こしめす輩もいる。

日本新聞

捕虜生活も段々慣れた頃、ソ連当局は捕虜に共産主義の教育を始めた。当初将校の吊るし上げが始まった。所謂反軍闘争？

二〇年の暮に、我々が、この収容所に入った頃、日夕点呼が有り、毎日中庭で軍人勅諭の斉唱が行われた。

- 一、軍人は忠節を蓋すを本分とすべし
- 一、軍人は礼儀を正しくすべし

一、軍人は武勇を尊ぶべし

一、軍人は信義を重んずべし

一、軍人は質素を旨とすべし

中庭に整列した兵隊は、直立不動で真剣そのもの、然し私は正直ピンと来なかった。そういう風潮の中、反軍闘争はソ連当局の強力な後ろ盾があっても成果は上がらないのは、当たり前だ。

所内では、木山、森安、岩本氏等が中心の民主グループが発足したが、当局の顔色を窺っているようでは？

その内、ハバロフスクに日本語版の「日本新聞」という捕虜専門の新聞が来るようになった。発行日も忘れたが、確か小針延次郎とかいう人が主筆で、共産主義謳歌の記事ばかりだ。例えばドンバス炭坑のスタハーノフという炭鉱夫が前人未到のノルマを達成したとか、又、変わった記事では、日露戦争で旅順港閉塞の際、広瀬中佐と共に戦死した筈の杉野兵曹長が助かって、中国に生きていた。軍神となっていたので、帰るに帰れず困っていた。とかの記事で面白くも何ともなかった。所謂赤新聞の類이었다。日本新聞が来ると、食堂に掲示され、一般の人達が読む事が出来た。

ある時の新聞に小学校の同級生の漫画が出ていたので、後日聞いたら、懸賞漫画で入選「確か？十ルーブル貰ったよ」

と、破顔咬笑した。

又、たまには映画が上映されたが、作業の時には用が足りても、映画の時のロシア語は、中々難しい。ノートが無いので、自家用コンピュータでは、飽和状態で困りもの。

映画の外に学識経験者の講演が一度だけあった。新京の建国大学教授の尾上正男先生で、物静かな学者タイプの人だったと思うが、話の内容は残念ながら記憶にない。尤も建国大学の先生では、共産主義の教育では、どう話したらいいか、戸惑ったことだろう。

新京の教育隊の中隊長の常盤井賢十中尉の毎週月曜日に行われる精神訓話は、流石京大の哲学科の教授だけあって、話の内容が斬新で、目を閉じて聞き入った処、班付の伍長に竹刀で「隊長殿の話を眠っている奴があるか！」と殴られたことがあった。

軍隊という処は、硬軟両方の人達の集合体だから、私のような不器用の者もいれば、白石兵長のような、何でもおじゃれという人もいる。使役に行って手頃の木を拾って来て下駄を作るのは朝飯前（私はダーメ）

何人かの人達はヴァイオリンまで作った。弓は收容所の前の馬小屋から、馬に断らずに

尻尾を失敬したらしい。色々部品を集め、楽団が出来上がった。

一方劇団は、国境から来た部隊は、亡くなった奥さん達の衣裳があるので、それを使った。落語は、本職かも知れないが、吉田奈良丸というのがうまかった。

劇団は、どうも我が班長、三輪軍曹が牛耳っていたような気がする。煉瓦積より、この方が適役だろう。

輪読会

民主グループでは、日本新聞を食堂に掲示する一方、新聞の輪読会なるものを始め、夕食後何人かが集まった。森安氏等が司会で、日本新聞に載っている事を、つまり共産主義の宣伝で、洗脳を目的とした会であることが分かった。出席者は皆もう、洗脳されて（表面は）いたようだ。

私はおませで、元服の前に、人知れず河上肇先生の「貧乏物語」など、所謂左の本を読んでいるので、今更結構であるので、輪読会は敬遠したが、参加者は尻つぼり、そこで、

本部事務所に通勤している私に、民主グループの世話役が目を付けた。

「今度の会に出て下さいませんか。」その頃話す人がいなくて。何だったら五分も喋ればオンの字ですよ。」

初年兵の私に、下士官の人が鄭重に頭を下げるので、

「私は、現役 of 初年兵で、訳あって、皆より三年ばかり遅く入隊したので、でもチョルマに入っていた訳ではないのです。（合法的徴兵延期）学も無いし、五分で良いですね。やりましょう。」

日本新聞に無いことを喋る事にした。

（民主グループの連中に悪いかな）

私はいよいよ話を始めた。

「私は、一九年の暮れに、二十三歳、現役で相模原の部隊に入隊、アングレンには一二月末に来ました。つまり、一八年の暮から、一九年の末まで、東京の生活でした。東京都民の台所は食糧が心細くなり、「ほしがりません勝つまでは」の合言葉、我慢、我慢の毎日でした。次が解りますか。星、錨、官、顔、闇、列、配、という順番で物が買える事が出来た。という事です。解りますか。星は陸軍、錨は海軍、官は役人、顔は顔役、闇は闇

屋、列は行列、配は配給という訳です。そのように物が買えたのです。私の会社は、新橋で、昼飯は会社で券を貰い、有楽町の東京宝塚劇場の地下の食堂で雑炊を食べていました。その雑炊も箸が立つか立たぬかの論争があつたと、聞いていました。

一方、赤紙も、徴用も段々激しくなり、女学生も軍需工場に行くのが当たり前でした。私の勤務して居た会社は南洋各地に事業地があり、砂糖、アルコール、燐砒、海運等の平和産業だったのが、国策の為、サイパン、テニアン等従業員の犠牲者も多いのだが、社長も民間人でありながら、海軍少将の待遇で海軍省に呼ばれ、保科善四郎軍務局長から戦況の説明を聞き、私も運輸課の末席にいたので、一九年当時の南方の戦況をある程度知って入隊しました。入隊するとき千葉県の佐倉に疎開していて、町の人達が駅まで、お送りしましょう。役場の兵事係の方の親切なお話しを

「有り難うございます。でも、もう戦争は終わりです。すぐ帰って来ます。見送りは結構です。畑仕事をなさって下さい。」

と家族の見送りも無く、単身電車に乗りました。後日友人にこの話をしたら、よく憲兵に捕まらなかったな。と言われて、啞然とした記憶があります。

合法的に徴兵猶予をお願いしたのだが、強権的の憲兵のこと、罷り間違えば、射殺され

たかもしれない。昭和の初め、浅草田原町のお茶屋、池田園の息子が徴兵忌避で茶壺の陰で憲兵に射殺された記憶があります。八歳頃のことだから定かでないですが？

此処には憲兵はいないでしょうね。

話をもとに戻しましょう。

私が南洋の会社（本社はパラオ島、東京事務所は日本橋）入社したのは、大東亜戦争の始まる一年前の一月始、希望はなるべく、辺鄙な島をお願いしましたが、パラオ支店の会計係で、一月一〇日に着任しました。パラオの港は濃い緑の島々に囲まれた箱庭のような透き通る海でした。一五トン位の小さなダイバーボート（真珠貝採取船）が四隻モヤツています。アラフラ海での操業の準備中。兎に角平和な島々です。

先日の帝国議会で松岡外相が、南の生命線の南洋群島には諸外国が脅威を感ずるような施設は有りませんと言明していましたが、まさかと思っていました。が、本当のようでした。波止場から、椰子並木を通ってメインストリートの会社に行ったが、陸軍も、海軍も一人も会わなかった。ただ、海軍は、武官府と行って前から佐官級を駐在しています。

さて、東京では、中国大陆の戦線が思うに任せず、A、B、C、D包囲網に車部が頭を抱えていて、下位春吉氏（イタリア通、ムッソリーニと交友あり、ダナンチオの友人）深

町孝之亮氏（右翼の浪人、前科有り）講談師伊藤某氏（伊藤痴遊ではない）イタリア大使館のアルデマーニ参事官等の講演会を開催、ファシズムの礼賛を行っていました。

この講演会は、当初、有楽町の電気クラブの小さな講堂で開催していましたが、下位春吉は、永井柳太郎、中野正剛と並び称される雄弁家で、深町孝之亮は常に和服の壮士タイプの雄弁家です。

当初の電気クラブの時は、聴衆は数える程しか少なかったが、瞬く間に九段の軍人会館を満員にするようになった。この大日本話道会は、東京の輿論を対米英戦争に駆り立てた罪は少なくないと思います。

話を又々元に戻すと、平和な島パラオにも一六年四月頃、回漕部の次長と売店の次長が相次いで東京に呼ばれました。朝鮮に人夫募集に行くのです。一方パラオに南洋庁海運事務所なるものが出来て、流れ星のマークを付けた（軍属）の人が会社の事務所にしばしば来るようになりました。相手は鈴木副長なので聞くと客は龍頭さんと言ったが、用件は、返答無し。二、三日してたまたま、残業していて、副長がロッカーを開けたとき、大きなファイルの背文字が陸軍と書いて有ったので、謎は解けました。

朝鮮に行った二人も相次いで帰任しました。

そして、龍一政さんは仮面を剥いで、中佐で船舶工兵の部隊長でした。十二月八日戦争が始まると、中国からの石炭をパラオ港に貯蔵、ラバール、ニューギニア作戦の中継基地になりました。パラオ支店は、御用船の石炭荷役、給水に社を挙げてご奉公した訳であります。パラオ支店の鈴木副長は、その後トラック支店に転勤になり、御用船国島丸の火事の事後処理で乗船、船の爆発で殉職したそうであります。

社員の犠牲は米軍が上陸したサイパンやペリリューは勿論、ニューギニア各地で戦死した社員が大勢いましたが、私自身は一八年一二月三〇日ジグザグ航法の貨物船（南洋海運のエリー丸）で宇品港に帰ってきました。」この後いろいろ特種もありますが、五分の予定が四五分になってしまつて、興に乗った訳では有りませんが、聞いている人に取っては、糞面白くないと、思われるかも知れませんが、長談議になって反省している次第です。終わって誰かが

「お宅、新聞記者ですか？」

と、聞いて来た人が有つたが、

「別に新聞記者では有りませんが、ただ、新聞を裏から見る習慣ですのぞ！」

輪読会が終わつて、森安氏が、何か聞きたいような素振りだったが、何かその後一味違つ

た応対が感じられた。兎に角、毎日シユターブに行っているし、収容所のソ連の将校や職員と接触が有るので、敬遠されたのかも知れない。なお、民主グループ活動も、何か、ソ連当局に点数を稼ぐ事を考えていると思われる。

セスタコフ上級中尉　ダモイ

セスタコフ上級中尉は、私達がすっかり収容所生活に慣れた頃着任してきた。

ソ連では、軍隊に政治将校のようなのが居て、共産党員がお目付役のような形で配属されているようである。彼は、別に捕虜に対して共産主義の教育をしたことも無いし、ゲー・ペー・ウーでも無いし、常に微笑を絶やさない紳士である。彼は毎週一回、確か月曜だったような気がするが、収容所の下の本部（シユターブ）に職員を集め、世界情勢の説明などの講義をしている模様だ。彼はレッキとした共産党員だという話を誰かに聞いたことが有る。この収容所では党員は彼だけだそうだ。中々なれない狭き門だそうだ。

彼は堂々たる体格で、仲々のハンサムである。当初彼とは口を聞いた事は無かったが、か

つてアバケイとやりあった時、カッカとして、食ってかかる私に、部屋の隅で愉快そうに聞き耳を立てているのに気が付いた事位である。

それと、いよいよ当ラーゲルで復員の話がチラホラ出て来て、若手の民主グループの江頭君等が、ダモイ（帰国）で十数人が収容所を出て行った。

「ザフトラ スラーズ」

《明日、間もなく》

と、気を持たせた帰国も、やっと本物だと感じた。帰国する者は体毛を剃るとの噂だったが、それは賛否が別れた。

映画が有るというので、食堂に行き後ろの方で立って見ていると、誰かが私の背中を叩く人がいるので、振り返ると、背の高いソ連人だった。

「ドーブルイ ウートロ」

《今晚は》

よく見ると、セスタコフだ。彼は私の耳に、小さな声で

「明日又、次の復員名簿が発表になるよ。君も入っているよ。いよいよ日本に帰れるね。」

皆には未だ言わぬ方がよいよ。」

「有り難う」

セスタコフは、私が嬉しくて、有頂天になると思ったかも知れないが、ドツコイ私は冷静だ。私は極楽蜻蛉でもないが、数ある復員者の名簿の内から私の名前を探して態々私に知らせて呉れた行為に腹の底から礼を言った。

私は、相変わらず映画を見ていたが、不思議にあまり嬉しくもない気でいた。

その映画は、どんな映画だったか、全然記憶がない。此处で見た映画は、「石の花」という見事なカラー映画と、日本敗戦を扱った太平洋戦争の映画だけで外は知らない。

さて、セスタコフ上級中尉の言った通り、翌日、第二回の復員名簿が発表になった。同年兵で、新京の教育隊（関東軍固定通信隊本部教育隊第三中隊第五班）以来一緒だった、臼射健太郎一等兵は今病気でタシケントの病院にいるそうだが、病人の場合、恐らく復員は見送りだろう。私達が復員する事が分かれば、どんな気持ちだろう。回復を祈るだけであつた。

いよいよ復員は本格的だった。将校の人達は後になるかも知れない。兎に角私達は、荷造りに取り掛かった。張替曹長から貰ったソロパンも何かの役に立つかも知れない。

リックサックも、装具は殆ど無い。ソロバンは忘れずに底にしまった。事務所の親友のセナ・エイデルマンに挨拶しなかったのは、何とも心残りだ。

門を出たところで、出発の時間を待っていると、見送りの婦人達の中に、お世話になった会計のチエルナシヨウワ女史の姿が自に入った。顔見知りの兵士に、ちよつとあの人に挨拶して来るから！とOKを取って列を離れ、チエルナシヨウワ女史の所に駆け寄った。ニコニコ笑っている彼女に

「ダスビダーニヤ」

《さようなら》

と、月並みの挨拶をした。すると彼女は、

「ちよつと待って、今、貴方の言った挨拶は、又来ますという意味があるの。だから、ダスビダーニヤはやめて、

「フシヨウ ハラシヨウ」

《ご機嫌、よろしゅう》

にしてね！」

「貴方はこれから日本に帰るのでしょうか。ダスビダーニアでは、日本は後三〇年、四〇年したら、又再軍備して、「ミカド」の命令があれば鉄砲担いでヒューと攻めてくるかも知れない。日本人の男は戦争が好きなのではないでしょうか。帰ったら女の人に戦争をしないよう話してください。

貴方もご存じのように、私の息子は跛です。ドイツ兵に追われ、積もった雲の中を、私に手を引かれ、逃げて、逃げて！」

「日本に帰ったら、女の人に、戦争反対のキャンペーンを是非お願いします。ではお元気で。」

私は返す言葉もなく、彼女の珍しくマニキュアの無い綺麗な手と、握手をして別れた。出発の時が来て、手を挙げて、

「フショウ・ハラショウ」

《ご機嫌よろしゅう》

と、最後の挨拶を、誰にするとなく。

約三年の捕虜生活も終止符を打つ時が来て、ユダヤ人、セナ・エイデルマンの友情を心

に秘めて、第三七二收容所第六分所を後にした。

アングレン川を渡ると、引込線で長い復員列車がいた。川向こうの收容所からの兵隊もいて、かなりの人員が列車の脇に行列して、乗車の時を待っていた。復員兵の雑踏の中をセスタコフが、用有りげに私の方に来た。

「前の方に、寝台の有る車両が有るから、そっちに行きなさい。」とのこと。

私は、何の事か分からなかったが、前の方に走って、ベッドの有る車両に行つて見た。

その車両に乗って見ると、何台かのベッドに青い顔の兵隊が寝ていた。看護婦と思う女性に私のベッドは何処ですか？と聞いた処、私の細い体をしげしげ見て

「チンピラトーライエス？」

《熱はありますか？》

「ニエツト」

《有りません》

「ガラワ バリ」

《頭が痛いですか？》

「ニエツト オーチンハラシヨウ」

「いいえ、とっても調子いいです」

「ポチム？ クトウ スカザール」

「なんで、誰が 行きなさいといったの？」

「タワリッシ セスタコフ プリカザール」

「セスタコフさんが言いました。」

看護婦は、それで納得したようで、首をすくめ、両手を開いて

「ニイハラショウ イジ」

「まずいなあ 行きなさい」

病人用車両からシャットアウトされ、仲間のいる車両に帰ったが、またセスタコフが来た。

今度は、**糧秣車**だ。イチヤモン付ける者は、居ない。来る時に一か月かかったので、今回も同様だろう。黒パンと小麦粉だ。小麦粉は、途中でパンにするのだろう。扉は開けっ放しだ。セスタコフが見回りに来た。

「この車両は、君一人だから、パンを敷き、ドンゴロス（麻の粗い布の袋）の上に寝たら

良い。パンは、各車両から取りに來たら渡せば良い。君は何の責任も無いから安心して。

単なる倉庫番だよ。ア、ハ、ハ、ハ」

ときに、君は、水筒が有るかね？。有ったら貸して貰いたい。外ならぬ人の頼みで、喜んで貸して上げた。連結器が大きな音を出して列車は動き出した。

貸した水筒は、次の駅で、満杯の牛乳が入って帰って來た。何に使ったのかは、聞かなかったが、水筒の中は、綺麗だったが、外側はヴォトカの匂いがプンプンしていた。

水筒と言えばアングレンに來た初めの頃 同年兵で亡くなった臼射君と共に縁の深かった清水君が腹を壊して苦しんで居たので、薬も無いし、湯たんぽの代用で、部屋の真ん中に有った四角い代用ストーブで湯たんぽを作っていた。それを見ていた班付の下士官が、

「木村、何やって居るんだ。」

「班長殿、実は、清水が腹痛で、暖める為、湯たんぽを作っているんです。」

「誰の許可だ。天皇陛下（直立不動）からお預かりした兵器を、湯たんぽにすると、何事だ。齒を食いしばれ！」

鉄拳制裁の雨が降り濯いだ。編上靴（へんじょうか）を改造した上靴（じょうか）スリッ

パ）は流石に堪える。間もなく気を失った。気が付くと頭の周りに同年兵達の心配顔があった。暫く耳がおかしかったが、その内、直った。殴った班長は、普段は静かな人で、模範的な下士官で私に同情する人は有っても、その下士官を非難する人はいなかった。なお何年か経って北海道から上京され、千鳥が測の墓苑でお会いした時、涙をたたえ陳謝されたのは、立派な人だと今更ながら敬服した。

参考にし添えるが、軍隊では水筒は兵器ではなくて、被服の範疇に入るとの指摘があった仲本先輩ありがとう。

虱 蚤 南京虫

暮れのある日、浴場の方から小走りに来たエイデルマンが私に

「キムラ、日本人は正月に虱を飾るの？」

私は、その意味が解らなかったのです、

「ポチム」

と、聞いた。エイデルマンは私に

「今、その浴場で、兵隊が入り口に蚤の絵を飾っているの、聞いた処、要領を得ないので、君なら解るんじゃないかと思つて、？」

私は、狐につままれたようで、彼と一緒に浴場に行つて見た。すると、浴場の入り口に、正月の門松の代わりに伊勢海老の絵が張つてあつた。絵は仲々上手なのだが、絵の具が無いのか、色は正に虱そのもの。私は、エイデルマンにこの絵は伊勢海老といつて長寿（長生き）の願いを込めているつもりだと説明した。聡明なエイデルマンは納得したようだ。ソ連人は虱が頭にこびりついているのかも知れない。

作業の休憩時間に、腹があまりに痒いので、腹巻きを取つて見ようとしてビックリした。何時の間にか蚤が一杯いる。腹巻を取つて見ると、巻いた晒しの間に二十四匹の蚤あまり元気がない。御主人の餌が栄養不良なのかも知れない。作業から帰つて毛布を見ると、いる、いる。畳んで表に持つて行き、振つて蚤を払つたつもりが、何の事は無い私のすねに、齧りついている。

作業の無い日に床の下の土を叩いて蚤の巣を固めた処、あまり蚤が居なくなつた気がした。

蚤が退治されたのかあまり気にしなくなった。

入所して何日か経って、或る日曜に宿舎の前に毛布を出して寝ころんでいると、宿舎の屋根の庇から、出て来る南京虫の行列を見た。皆あまり元気がない。やっと歩いている赤ちゃんのようで、一列縦隊である。南京虫は日本の物より殻が柔らかい。すぐ潰れるようだ。前に仲本班長の寝台に遊びに行った時に、上の寝台から落ちた南京虫を、頭の毛で殺した事があるが、油臭いのは日本の物と変わらないが、殻は弱い。南京虫は、東京にいた時、大分苛められ、クリーク等の退治方も知っているが、南京虫評論家ではないので、この辺で止めておく。後日休みの日に収容所の職員に、折角休んでいるのに、外に出ろといわれ、皆、疲れているのにと、ブーブー言っていたが、それは、南京虫退治の薬を撒いて呉れる為と解って、納得したようだ。言葉が解らないのは、困り物。

ドイツ人の反ソ思想

作業から早く帰って、作業着を、洗濯しようと、洗い場に行ったら、見慣れない白人が居て、十数人の捕虜がその白人と話し合っている。相変わらずの野次馬根性でその群の中に入った。相手はドイツの捕虜である。将校らしい。ロシア語も勿論ブローケンながら、要旨は分かる。彼は川向こうのラーゲルの人で、馬鈴薯と米を交換して貰いたいとの事である。ドイツ人は馬鈴薯が欲しいのだが雑穀が支給されたので代えて貰いたいとの陳情で交換はOKだそうである。

時に、君達日本人の捕虜は、非常に働いているらしいが、私等ドイツ人は違う。ノルマ糞くらえ。ドイツは戦争に負けたとは思わない。今に見て居ろ。今は捕虜だが何れこの仇は取る。」

血色の良いその将校は、

「日本の捕虜は何を考えているのか？」

私は、その色の白い優しそうなドイツ人の軍人の気迫に、ただ圧倒されるばかりだった。

民主グループの木山、森安両氏は、このドイツ人の軍人と対談して見たら面白いだろう。何れその内に。

レバー キニーネ

週番下士の小松原曹長が夕食の兵舎に来て、

「鳥目の者は居ないかな。」

とふれて回った。

やはり、辺鄙なアングレンでは、ビタミンの補給は無理なのかも知れない。ソ連の民間人も戦争の惨禍も漸く癒えてと思うが、とても捕虜の分まで手が届くのは無理だろう。

「鳥目が居たら、申告するように。各班長は、私の所に申し出てください。以上」

然し、鳥目は数える程度しか居ない。聽て小松原曹長がレバーを持って来た。それは、形状は焼き鳥のようである。でも、鳥は、少しはいるかも知れないが、多分山羊の肉ではな

いか。でもレバーには代わりない。

自称ビタミンA欠乏症の患者は、半信半疑それを食べ、これは旨い。途端に

兵舎はビタミンA欠乏症が大勢出て来て、小松原曹長は患者を数えるのに、ちよつと困った。

此処は水が悪いので、飲み水は必ず沸かして飲むようにと、きつく言われていて、私は自慢じゃないが、三年間一滴も飲まなかった。

兵隊に行く前の社員生活は、前にも書いたが、南洋興発パラオ支店の社員だったので、同僚はデング熱（一過性の熱病）に罹る者はいても、マラリア患者は殆どいなかった。勿論、常時キニーネは用意してはいたが、私が知っている限りその必要はなかった。

アングレン当局からは、水は絶対に飲まないようにと言われていたが、炎天下の労働では克己心の有無に拘わらず、少々無理かと思われる。

マラリア予防に、収容所はキニーネを飲むように渡されるが、キニーネは苦く、喜んで飲む薬では決してない。

ついでにヨーグルトの話をしよう。

入所以来大分経ってからの事、虚弱の者にドロジョーというドロドロした物が支給された。相変らず被害妄想の人達は、一口味見をして吐き出した。中には

「露助の野郎、捕虜と思つて、腐った牛乳を飲ませやがつて！」

私は酒の鑑定のように一口飲んで見て、これは発酵しているのだ。何か分からないが体には良いと直感した。作業場でウズベックの老人に聞いたらドロジョーは長寿の為の飲物で毎日飲んでいるし長生きの秘訣だろうとの話。

私は、今も毎日カスピ海（ウズベックの方角）沿岸のヨーグルト（ドロジョー）を飲んでいる。近所の人達は挨拶代わりに

「お宅はご夫婦共、お顔に皺が無いですね！」

と言われるが、褒められているのか、笑われているのか、さっぱり分からない。

初めの頃、近く（三キロ程藤沢寄り）の牛を四、五頭飼っている家から搾りたての牛乳を分けて貰い、家で煮沸してヨーグルトを作っていた。近所の人達に自家製ヨーグルトの製法を教え、種を大勢の家々に分けてあげたが、毎日の事となるとなかなか難しいもので、牛乳をきらせてしまったり、夏と冬では発酵の時間も違うし、雑菌がまじらないように管理しなければならなかったりで、ずっと続いたお宅はないようだつた。

私の家でも旅行などで長く家を空ける時は冷蔵庫に入れたり一緒に連れて行ったりで、一苦労もあった。

しかし、次々に新しいヨーグルト菌が出回り、近所から頂いたりして未だに（二十余年）続いているのは、ちよつと変わった性格だからかも知れない。

鉛筆 インク ペン先

シユターブ（本部）に通い始めて何回か経った朝、ナイフで鉛筆（ヘクト鉛筆）を削って、削りかすを捨てようとしたら、エイデルマンに

「キムラちよつと待て」

と止められた。「ポチム」と訳を糺すと、彼は新聞紙に有った削りかすを「フー」と飛ばすと、残った芯のかけらをインク瓶に入れ僅かな水を入れ、瓶を振って私に渡した。訝る私に、彼は机の引き出しから小さな紙の袋を出して見せた。袋には勿論ロシア語で、「チエルニラア（インク）と印刷されてあった。顆粒状のインクを見るのは初めてだった。酷

寒の冬を迎えるソ連ならではの知恵かも知れない。

なお、ロシア語では鉛筆は「カランダーシ」と言う。

インクの話の次はペン先で、三題噺と致しましょう。

矢張りその頃の話で、エイデルマンが炊事に渡す伝票は消ゴムでは消えない鉛筆（ヘクト鉛筆）でさつき書いた鉛筆で書いていた。

エイデルマンが書く書類は、字が太くゴシックのようである。使っているペンを見ると、先が擦り減って異常に太い。それでエイデルマンに聞いて見た。

「貴方が書いてる書類は、失礼だが、字が異常に太いが何故ですか？」

「字が太い？これは、ペン先が摩耗しているからさ。まだ使える。」

「収容所の事務室には貴方が見て、まだ使えると思われるペン先が有ると思うので行ってみましょう。」

事務所には、顔を知ってる人は居なかったが、下士官だったような人に

「捨てたペン先が有りますか？有ったら下さい。」

「そのペン皿に何本か有るよ。持ってたたら、良いよ、何に使うの？」

私は用途は言わず、ペン皿にあった十本程を掴み

「有り難うございました」

と、礼もそこそこシユターブに帰った。

エイデルマンは、そのぺん先を見て

「新品同様だねー。有り難う。使わして貰うよ。良い物を戴いて、こんな事を一言うの悪
いが日本人は、こんな使える物を平気で捨てるなんて！だから戦争に負けるんだ。」

相変わらずのウインクで事も無げに言うのは私を良い友人扱いしているからであると思
う。

センナリ センナリ

事務所でうちの兵隊の各職場からの稼働計算書の検算をしていたら、紙が大小で大袈裟
に言えば、四苦八苦していたら、ラーゲルから用事で来ていた兵隊が、私が読んで上げよ
うと助け舟、では読んで貰うと、私の感では、主計兵か企業の会計屋かと思える。読み上
げ算は、ルーブルとカペイクであるが、我々は日本人だから、円と銭で読んでもらった。

流石音吐朗々、正確に計算が出来た。

エイデルマンの所に用事で来ている人が、私が日本のソロパンを弾くのと、一方の兵隊の読み上げ算を興味深げに見ていたが、

「シトウタコイ センナリ センナリ」

私は、シトウタコイは、これは何だとは、分かるが、センナリ センナリは、意味不明。エイデルマンが私に代わって説明した。

「日本のお金は、円と銭で九十九銭の上は一円、ナリは、数字が続くと間違えるので、間を取って間違えを防ぐ。そういう説明で良いかな？タワリツシ・キムラ。」

エイデルマンの客は納得したらしい。ユダヤ人エイデルマンは頭が冴えてる。

「ヒツチハイク」 歓迎

アングレン駅を出発した我々の復員列車は、恐らくナホトカを目指して新緑のシベリアを走る。（あまり速くはない。）

アングレンを出た時、セスタコフ指示で大きな有蓋貨車（ワムではない、ワキかも知れない。）に私一人。たまにパンを受領に他の車両の責任者が来る位で、広い貨車は、パンや、パンの材料の小麦粉の積荷のみではガラガラである。

輸送指揮官のセスタコフ上級中尉はあまり立ち寄らないが、どうも日露戦争の戦記を読んでいるようだ。

列車は捕虜輸送の専用車で、駅に着いても引込線に入るので、乗客は皆無である。

ある時、列車が出発の直前になって初老の老人に、この列車に便乗させて貰えないか、と懇願された。つまりヒッチハイクの頼みだ。

どうせ広い貨車だ。老人一人くらい何でもない。そして老人の身なりから貧乏人だと直感した。今日はセスタコフは来ないだろうし、もし来ても、優しい彼は、文句は言わないと推量し

「椅子も無いし、ドンゴロスで座って貰うけど、良いですか？宜しかったらどうぞ。」

老人は、私が上司に許可を貰わずに、勝手にOKしたのが心配そうだったので、さらに

「監督の将校が来たら、私が話してあげますよ。此処の将校は物分かりの良い人だから心配ありませんよ。」

老人は大変喜んで、小さな荷物二、三個を貨車に放り入れ、自分は貨車の手摺りをかりて乗り込んできた。荷物を手元に置くと、

「日本の兵隊さんは、何処まで行くのですか。ナホトカですか。？」

「多分ナホトカだと思うけど。」

「何処から乗って来たのですか？」

「アングレンですよ。」

どうもアングレンは分からないようだ。

「労働は大変だったでしょう。でも日本に帰れるのは幸福ですね。」

老人は、貨車にいるのは私達だけだと確認すると途端に雄弁になった。

ソ連はドイツ軍との戦争で二億の人口の十パーセントを死なせ、妙齡の女の人は男日でありをかこっている状態である。

「でも戦争に勝って、「スターリン」万歳でしょう。」

「とんでもない。「スターリン」なんか死ねば良い。あんな悪い奴はいない！」

私は前から、独裁国ソ連で、国民が「スターリン」をどう思っているかと、興味があった

ので、チャンスを見て、喋りそうな人を掴まえて聞くと、周りを警戒しながら、唾を吐く人を何回も見た。

今日は貨車は私しか居ない。思う存分「スターリン」の悪口を言いたいのだろう。

「私の家は、牛も沢山いたし、召し使いも何人も居て、本当に裕福な暮らしだったのに、
「スターリン」になってからは、働かないと食えなくなってしまった。私の父も「スターリン」を恨んで死にました。」

「分かりました。「スターリン」を憎むのは分かりましたが、「レーニン」はどう思いますか。」

「「レーニン」は違います。「レーニン」は偉い人です。「私も、父も「レーニン」は崇拝しています。「レーニン」は立派な人です。帝政ロシアを解放して呉れた人です。兵隊さんは日本に帰ったら、「スターリン」の悪口を大いに宣伝して下さい。お願いします。」
「アングレン収容所を出るとき、チェルナシヨワ女史から戦争反対のキャンペーンを頼まれ、又この老人から共産主義への誹謗を、日本に帰ったら約束を守るのは至難である。」

この老人の外に、二、三のヒッチハイクのお手伝いをしていたが、私の見てやろう、開いてやろうの原稿は事欠かない。

おわりに

「貴方は、兵隊は何処？」

「満洲に居たので、ソ連に引つ張られ、三年程で帰って来ました。」

「寒かったでしょう。よくご無事で！」

「食べ物も、満足に貰えなかったそうで、大変でしたね。」

ソ連から帰った兵隊が、一様に尋ねられる台詞だと思う。マスコミも、お涙頂戴が一般に受けるので、得てして虚偽の報道を強いられていることが有れば、問題である。

私は、あと二、三年で喜の字である。実はこの文章は記憶を辿りながら書いたもので、数字等は間違っていればご勘弁の程を。特に在ソ中に書いた物はナホトカで、全て没収され、記録がない。

素人の書いた物、おかしな所はご判読を。